

御射山遺跡

～御射山遺跡第Ⅰ調査報告書～

昭和54年

箕輪町教育委員会

御 射 山 遺 跡

昭和54年

箕輪町教育委員会

序 文

三日町上棚地区の農業基盤整備事業に伴なう、埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。

御射山第二遺跡については別に報告をしたが、福与大原遺跡と共に竜東地域を代表する遺跡である。

出土した遺構は縄文時代中期で、12の住居址を確認した。また出土した遺物の類も非常に多く、特に土笛、有孔鉗付土器など類の少ない貴重な出土品を見ることができた。

調査は栄学芸員を中心として、夏休み中の高校、大学及び地元の作業員の方々の協力を得て、綿密に進められた。

本報告書作成に当り関係各位に厚く御礼を申上げます。

教育長 樋口彦雄

凡　例

1. この調査は、箕輪町三日町上横地籍の農業基盤整備事業に伴うものであるため、事業着工前に調査を完了する必要上緊急の記録保存事業とした。
2. 報告書は図版を主体とし、文章記述は簡略とした。
3. 土製品及び黒曜石製石器類は $\frac{1}{15}$ 、土器及び他の石器類は $\frac{1}{3}$ 又は $\frac{1}{6}$ とした。
4. 遺構の縮尺はそれぞれの図にスケールを入れてある。
5. 本報告書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。
○本文執筆者 林 茂樹・柴登巳夫・竹入洋子
○図版製作者 土器・石器の実測、遺構実測図製作
藤森美枝・竹入洋子・石堂雅子・藤沢伸子・馬場保之
中村哲二・唐沢浩志・古屋公彦・柴登巳夫・小池幸夫
○写真撮影 林 茂樹・柴登巳夫
6. 本報告書の編集は主として箕輪町教育委員会があたった。

目 次

序 文	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
図版目次	
表 目 次	
第 I 章 遺跡の立地.....	1
第 1 節 位 置.....	1
第 2 節 自然環境.....	2
第 3 節 歴史的環境.....	3
第 II 章 発堀調査の経過.....	5
第 1 節 発堀調査に至るまで.....	5
第 III 章 発堀調査の結果.....	7
第 1 節 調査結果の概要.....	7
第 2 節 遺 構.....	9 ~ 22
第 3 節 遺 物.....	23
(1) 土 製 品.....	23 ~ 24
(2) 石 器.....	29 ~ 42
(3) 土 器.....	57 ~ 61
第 IV 章 まとめ.....	64 ~ 66

挿図目次

第1図	位置図	1
第2図	遺跡周辺の地形	2
第3図	周辺遺跡分布図	4
第4図	地形及び発堀区域図	7
第5図	遺構全測図	8
第6図	第1号住居址実測図	9
第7図	第1号住居址地層断面図	10
第8図	第2号住居址実測図	11
第9図	第2号住居址土器集中区分布図	12
第10図	第2号住居址炉址断面図	12
第11図	第3号住居址実測図	13
第12図	第3号住居址内ピット地層図	13
第13図	第3号住居址ピット内土器出土状況	14
第14図	住居址第1集中区実測図	15
第15図	第4号住居址地層断面図	16
第16図	K-9グリット内石組実測図	17
第17図	溝状遺構実測図	17
第18図	住居址第2集中区実測図	18
第19図	住居址第2集中区地層断面図	19
第20図-1	第3号住居址取り出し図	16-1
第20図-2	第4号住居址取り出し図	16-2
第20図-3	第5号住居址取り出し図	16-3
第20図-4	第6号住居址取り出し図	16-4
第20図-5	第9号住居址取り出し図	16-5
第20図-6	第7号住居址取り出し図	20-1
第20図-7	第8号住居址取り出し図	20-2
第20図-8	第10号住居址取り出し図	20-3
第20図-9	第11号住居址取り出し図	20-4

第20図-10	第12号住居址取り出し図	20-5
第21図	第8号住居址地層断面図	21
第22図	第7号住居炉址地層断面図	21
第23図	土括墓実測図	22
第24図	土括墓断面図	22
第25図	土製品	25
第26図	石器実測図(1)	26
第27図	石器実測図(2)	27
第28図	石器実測図(3)	28
第29図	石器実測図(4)	29
第30図	石器実測図(5)	30
第31図	石器実測図(6)	31
第32図	石器実測図(7)	32
第33図	石器実測図(8)	33
第34図	石器実測図(9)	34
第35図	土器実測図(1)	43
第36図	土器実測図(2)	44
第37図	土器実測図(3)	45
第38図	土器実測図(4)	46
第39図	土器実測図(5)	47
第40図	土器実測図(6)	48
第41図	土器実測図(7)	49
第42図	土器実測図(8)	50
第43図	土器実測図(9)	51
第44図	土器実測図(10)	52
第45図	土器実測図(11)	53
第46図	土器実測図(12)	54
第47図	土器実測図(13)	55
第48図	土器実測図(14)	56
第49図	土器実測図(15)	57

表 目 次

表—1 石器一覧表 (1).....	35
表—2 石器一覧表 (2).....	36
表—3 石器一覧表 (3).....	37
表—4 石器一覧表 (4).....	38
表—5 石器一覧表 (5).....	39
表—6 土器一覧表 (1).....	62
表—7 土器一覧表 (2).....	63

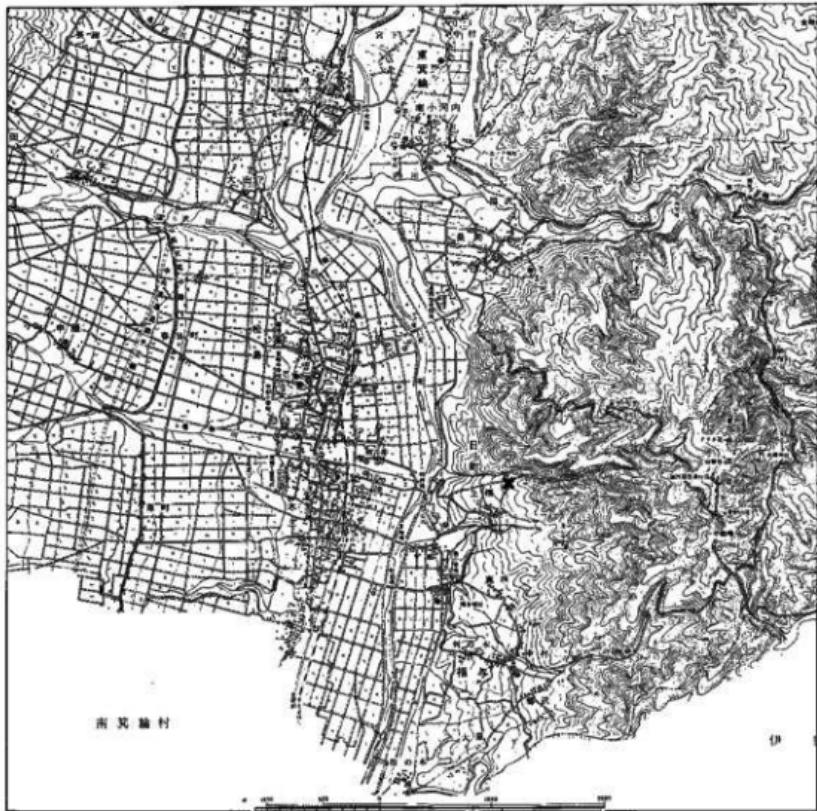
図 版 目 次

第1図版 遺構全景
第2図版 住居址 (1)
第3図版 住居址 (2)
第4図版 遺構 (1)
第5図版 遺構 (2)
第6図版 遺構 (3)
第7図版 遺物出土状況
第8図版 調査状況
第9図版 遺物 (土器)
第10図版 遺物 (石器)
第11図版 第2号住居址遺物出土状況 (1)
第12図版 第2号住居址遺物出土状況 (2)
第13図版 出土土器 (1)
第14図版 出土土器 (2)
第15図版 出土土器 (3)

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位 置 (第1図)

御射山第一遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町 232~234 番地に所在する。西南にゆるやかな傾斜面を呈した扇状地上に位置している。国鉄飯田線木下駅の北東約 1km ほどにあたり、箕輪町を一望にできる場所である。遺跡地の標高は 765m 前後で、眼下を流れる天竜川との比高は約 100m を計る。



第1図 位 置 図

第2節 自然環境

箕輪の町を東西に二分するように流れる天竜川は、広い冲積面と河岸段丘地形を形成している。天竜川西の地域は経ヶ岳山麓から東方に流下する小河川、即ち、大泉川、帶無川、深沢川等によって複合扇状地形が形成されている。河川の運搬堆積によってでき上った複合扇状地形は東方に向かって緩やかな傾斜をしている。天竜川左岸(竜東)は背後にすぐ山を控え、その山地を侵蝕して西方に流下する小河川により、変化の多い扇状地形を形成している。又、山が急傾斜で河川の流れが早いため、一時に急激な出水で大量の土砂を押し出すため「天井川」のような特徴ある地形を見ることもできる。扇状地は天竜川とその支流によって順次侵蝕され、雑段形の段丘を形成し、各段丘面は、厚さ6m余のローム層に覆われ、多くは畠地、及び村落のある台地となっている。このように東西の地形もかなりの相違を見ることが出来るが、背後に控える山地の主な岩石も違っている。西方のそれは粘板岩、砂岩、チャートなどである。東方の山地は花崗岩、閃緑岩、結晶片岩類であり、一帯は花崗岩の風化した砂土を多く見ることができる。遺跡の位置する地形は南西に傾斜する扇尖部上にあり、まさに箕輪の地を一望にできる遠望の開けた所である。北には山を背負い、東側には豊かな湧水の出る所があり、日当り、遠望といい、住居をかまえるには絶好の場であったと思える。ここ上棚部落一帯は多くの遺跡が密集しており、竜東における一大遺跡地帯を形成している。



第2図 遺跡周辺の地形

第3節 歴史的環境

御射山遺跡を取巻く歴史的環境は、先史より近世に至るまでじつに豊富である。今回の調査における時代的中心は、縄文時代中期と、平安時代である。しかし周辺においてその出土遺物より見て、縄文中期よりさらに2~3,000年以前より人々の生活があったことを想像することができる。本遺跡の東南約400mのところにある澄心寺下遺跡は、縄文時代早期の押型文土器を多量に出土し、竜東地域においては早期土器類を最も多く出土した遺跡といわれている。又、東方山頂に位置する葦野遺跡も早期土器や石器を出土している。(注1)竜東における縄文時代早期遺跡はこれ等の外にも数ヶ所確認されており、竜西地域に対してはるかになくなっている。縄文時代前期になると本遺跡と地続きの田畠遺跡がある。この遺跡はこれまでに諸磯式土器及び、下島式土器の良い資料を出土しており、今後十分注意しなければならない遺跡である。この附近一帯の東斜面は段丘空端に至るまで黒曜石片が多く、昔より多くの遺物が採集されている。(注2)本遺跡の西方斜面半ばに天王塚と呼ばれる小円墳が一基確認されている。この古墳は二十余年程以前に庭石に使用する目的で、石室を形成していた石が、ほとんど運び出されてしまい、現在では、わずかに残った石などから形を想像することができる。畑の中に10m四方にわたって約50cm程度高くなり古墳の規模を推測するだけである。この他に上棚部落の中に一基あり「おしりょう様」と呼ばれている。ここにもわずかに石が三つほど見えるだけで、古墳の形態はほとんど留めていない。又、本遺跡北の小高い場所に「御射山社」が祭られている。(注3)

注1. 葦野遺跡は昭和38年秋に、箕輪町教育委員会により、故藤沢宗平氏を团长として発掘調査された。遺物は縄文時代早期の押型文土器、石錐、磨石などが発見された。遺構は一ヶ所のピットと住居址らしい平らな一部が検出されたが、確定するまでは至らなかつた。出土遺物は箕輪町郷土博物館に展示してある。

注2. 土地の人々は黒曜石が多く落ちている畑を「星クソ畑」というような呼び方をしている。昔から黒曜石片のことを星クソとか星の欠らんと呼んだことからこういう名前がついたものと思う。

注3. 御射山三社の本社は三日町唐沢家(神職)の上方にあり、その場所を古来(神府、御室)と呼ぶが9月の例祭はこの神府社と箕輪南宮神社秋宮の神体とを神輿で三日町上棚東方の山麓にある御旅所に遷して行なわれる。これを穗屋御狩の神事という。又、箕輪南宮神社にある神体は、9月の例祭に御旅所へ上って御射山三社の祭神のうちに加えて祭りが行なわれ、12月27日の夜、御神渡神事によって木下の春宮に遷され、7月の南宮神社の夏祭り後また秋宮に遷される。

御射山三社には戦国の当時、武田信玄、木曾義昌がそれぞれ社領を寄進している。

箕輪遺跡内にある御宝田はこれ等の神事に關係する場所ではないかと考えられる。



第3図 周辺遺跡分布図 2,500分の1

- | | | | | | | |
|--------|-----------|---|-----------|-----------|------|------|
| ①御射山 | ②田畠 | 烟 | ③天王塚古墳 | ④おしりょう標古墳 | ⑤渡心寺 | ⑥小学校 |
| ⑦鹿塙 | ⑧石仏 | | ⑨大原 | ⑩矢田 | ⑪上の | ⑫馬場 |
| ⑬箕輪山 | ⑭猿 | | ⑮南城 | ⑯北城 | ⑰上の中 | ⑯大せ屋 |
| ⑯中沢坂下路 | ⑮本城 | | ⑰王墓古墳 | ⑱堂地 | ⑲中の | ⑲ま |
| ⑯久保畠古墳 | ⑯羽場の森三号古墳 | | ⑯羽場の森二号古墳 | ⑯羽場の森一号古墳 | ⑲中の平 | ⑲殿 |
| | | | ⑯上の平古墳 | ⑯上の平 | | |

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

本地区は箕輪町三日町地籍の天竜川左岸台地上に位置する水田および畑作地帯で、地区一帯は水田と畑が点在し、排水の悪い湿田が多く、区画も不整形で小区画であり農業機械の導入にも支障をきたしている現状であった。このような現状を打開するため、又、水田の多目的利用のための乾田化ということも合せて計画されたのである。そして、農業基盤整備事業圃場整備上棚工区として事業が計画され、昭和54年度から実施されるはこびとなったのである。それに伴ない、計画が示された昭和53年度から圃場整備予定地区内を数回にわたり現地踏査を実施した。その段階において埋蔵文化財の発見が確認されたため発掘調査の計画を進める。昭和54年度に入り、県教育委員会文化課の指導のもとに調査計画を立案する。その後、日本考古学協会員、林茂樹を団長とする調査団を組織し、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなった。

調査団

團長	林 茂樹	日本考古学協会会員
調査主任	柴登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
調査員	小池幸夫	静岡大学々生
"	三沢 恵	立正大学々生
"	北条芳隆	岡山大学々生
"	千葉 豊	静岡大学々生
"	酒井俊彦	"
"	木下 久	立教大学々生
"	福沢幸一	中央道調査員

参 与	馬場玲一	箕輪町教育委員会教育委員長
"	原 茂人	" 委員長職務代理
"	戸田宗十	" 教育委員
"	桑沢良平	"
"	春日琢磨	箕輪町文化財調査委員会委員長
"	荻原貞利	" 調査員
"	星野和美	" "
"	矢沢喬治	" "
"	市川脩三	" "
"	小川守人	" "

参 与	堀口貞幸	箕輪町文化財調査委員会調査員
"	上田晴生	"
"	藤田寛人	"
事務局	河手貞則	箕輪町教育委員会教育長 54年12月まで
"	樋口彦雄	" 教育長 55年1月から
	丸山昭夫	" 教育課長
	唐沢千洋	" 社会教育係長
	中村文好	" 社会教育主事
	柴登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
	竹入洋子	"

2. 発掘調査の経過

圃場整備計画が示された昭和53年度より、埋蔵文化財の包蔵地等について御射山遺跡内を数回にわたり踏査した。その結果御射山遺跡内における発掘調査が必要となり、昭和54年度に入り、実施の方向で計画を進める。7月下旬より御射山第一調査地区より作業を進める。ブルトーザーにより表土を20~30cm 排土した後、グリットの設定を行なう。東西に10列、南北に19列のグリットを設定し、西南の角より調査を開始する。調査は好天に恵まれ順調に進む。始めて間もなく、D-12 グリットを中心に落込みが確認され、附近グリットを拡張して調査する。その結果、中心部に石組の炉を有する円形の住居址であることが判明した。又、調査区東角の18, 19列に南北に長い溝状の落込みが検出される。これは水が流れた様子を伺うことができる。調査が開始されて数日後には1-12, 13 グリットを中心に複数の落込みが発見され、H列からL列までは西列に拡張グリットを設定し、落込みの確認を行なった。その結果、5~6ヶ所の住居址が切り合って検出され、このうちの第2号住居址内からは多量の土器が出土した。土器は炉址の南側に並べるようにして床面上に置かれている。この内には大形の有孔鉢付土器も含まれている。この第2号住居址は他のものとは少し異った住居址であろう。この住居址の集中区のすぐ北側にも同じように5~6ヶ所の落込みが確認され、なかでも第9号住居址は非常に大きく、住居址内には土器が多量に含まれており、この状況は第2号住居址の場合とは異なり、廃絶した後の凹地に土器を投げ入れ、それが少しづつ、埋没しながら土器が重なっている状況が伺われる。この地区はプランをほぼ同じくして、何回か掘られて、繰返し住居址に利用されている。調査地区内には二つの集中した住居址区があり最終的には12ヶ所の住居址を確認したが、まだ1~2ヶ所重複して住居址があるものと推定される。細部については別に記し、以下に記したような成果をあげることことができた。



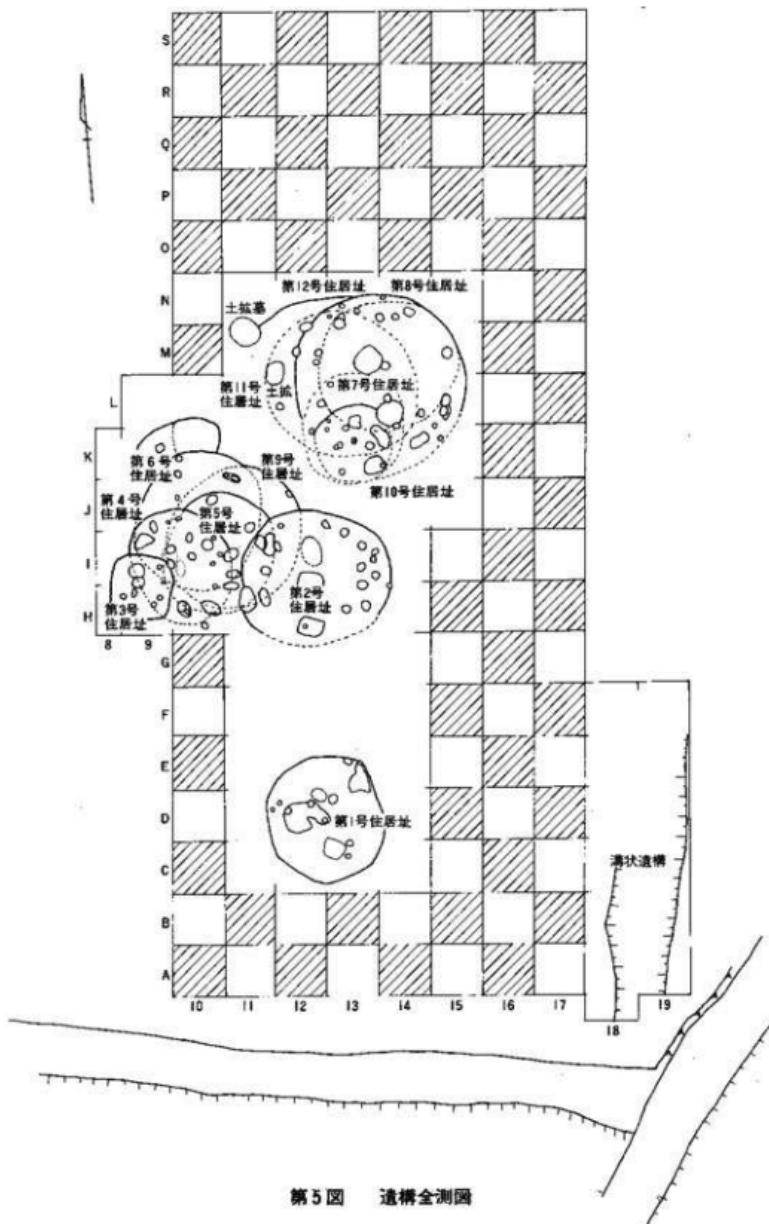
第III章 発掘調査の結果

第1節 調査結果の概要

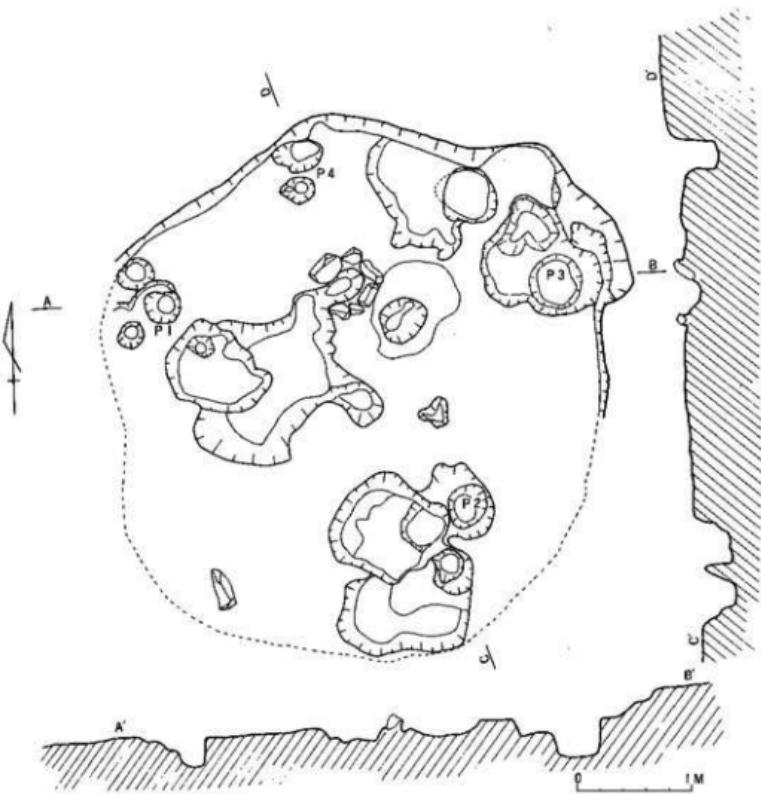
調査の結果、縄文時代中頃の時期を中心として多くの遺構が検出された。竪穴住居址は12ヶ所溝状遺構、土括、土括墓、炉址状石組各1ヶ所などである。竪穴住居址は2ヶ所に集中し、第1集中区には3, 4, 5, 6, 9の5ヶ所の住居址が切り合い、住居址のプラン、前後関係等難しい部分であった。又、この他にも焼土や、貯藏穴、柱穴状ピットの数などからして1~2の住居址が造られたものと想像される。第2集中区には7, 8, 10, 11の5ヶ所の住居址が切り合い、ここにも非常に複雑な状況であった。5ヶ所の住居址のプランが第8号住居址という大きな遺構の中にはほとんど含まれるという状況であり、第8号住居址と第12号住居址はプランがほとんど重複している状態であった。又、この集中区の西側には、土括墓と思える施設があり、内部には、多くの石と土器が入っていた。この施設の南に炉址状の小さな石組が検出されたが、内部からは何の出土もなく、どのような性格の遺構か疑問である。遺物は非常に多く特に第2号住居址と、第8号住居址に集中した。第2号住居址は多数の土器を床面上に並べたような状況で出土し、その量、出土の状況から考え、何か特別な意味をもった住居址であるように思える。第8号住居址内においても多数の土器が出土したが、ここは2号住居址とは少し状況が異なり、住居址が廃絶された後の窪地に投げ入れられたような状況で出土している。多くの土器と共に石器も多数出土し特に黒曜石製の石器が多く見られた。



第4図 地形及び発掘区域図 1,500



第5図 遺構全測図



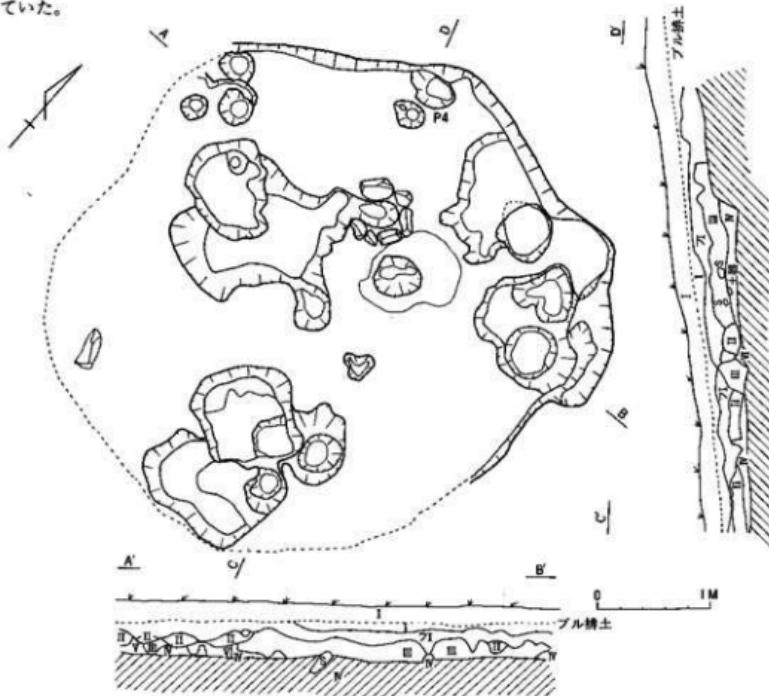
第6図 第1号住居址実測図

第2節 造構

1) 第1号住居址（第7図）

本住居址は調査開始最初に発見されたもので、D-12, 13 グリットを中心に検出された。北側の壁にあたる位置が落込みとして確認されたが、住居址を設定した面は南に低くなった傾斜であるため、南側の部分は壁の立ち上がりが黒土層中になり、確認できなかった。又、住居址内においても耕作による深耕で何ヶ所か床面が掘り窪められていた。住居址のプランは壁の確認が北側と東側の一部分であったため全体を推測するのは困難であるが、予想されるプランは第7図のようである。床面は東南がやや低くなつており北寄りの部分ほどしっかりととした叩きになつてゐるが全体的には床面の遺存状況はあまり良くない。壁はやや急な斜壁で落込み確認面からの壁高は22 cm 前後である。住居址内には十ヶ所余のピットがありほぼ円形を呈している。これらの中でP₁～P₄は主柱穴であろう。この4ヶ所の他にP₁とP₂の中間にもう一ヶ所あったと思われる。5本の主柱穴によって屋根がささえられていたものと予想される。P₁～P₄は床面からの深さが、

それぞれ、23, 27, 37, 30cm という数字になっている。このうち、柱穴底部のレベルは P₁, P₂, P₄ はほとんど同じであり P₂ のみが 10cm 低くなっている。柱壁はいずれも堅いローム面である。炉は住居址中央やや北寄りに位置し 6 個の長方形の河原石によってほぼ円形に組まれている。西側の石一つが取り除かれているが、そこに入っていたと思われる石が住居址床面西寄りから発見されている。炉の内部は直径 30cm 前後で炉内は繰返し使用されたことを物語るように焼土化していた。



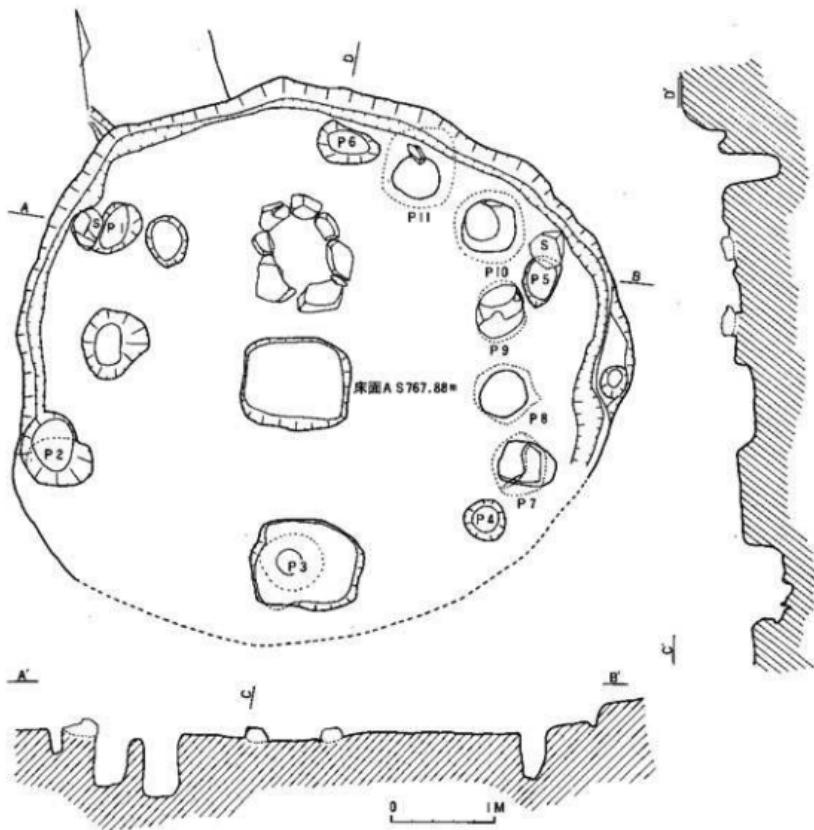
第7図 第1号住居址地層断面図

第1号住 東西セクション
水準レベル 2.19
レベル誤差 765.30

第I層 撥乱による黒褐色の土 稲作されている。
第II層 撥乱による黒褐色の土 1よりもつぶがある。
第III層 ローム色の土を含む 茶褐色の土、所々ロームブロックを含む。
第IV層 橙色の土、ロームを含む量が多くなる。ブロック状の所も数ヶ所見られる。
第V層 ローム状の土、ほとんどロームである。
第VI層 木の根や動物による擾乱。
地盤 土炭が少しだらばっている。

第1号住 南北セクション
水準レベル 180.0

第I層 撥乱による黒褐色の土 稲作土。
第II層 撥乱による黒褐色の土 1よりも空気が入っていいでやわらかい。
第III層 ローム色の土を多少含む茶褐色の土 所々ロームブロックを含んでいる。
第IV層 黄褐色の土、ロームを含む量が多くなる。ブロック状の所が多くなり土が少しづつ入っている。
第V層 ローム状の土。
第VI層 木の根や動物などによる擾乱。
地盤 土炭も入っている。



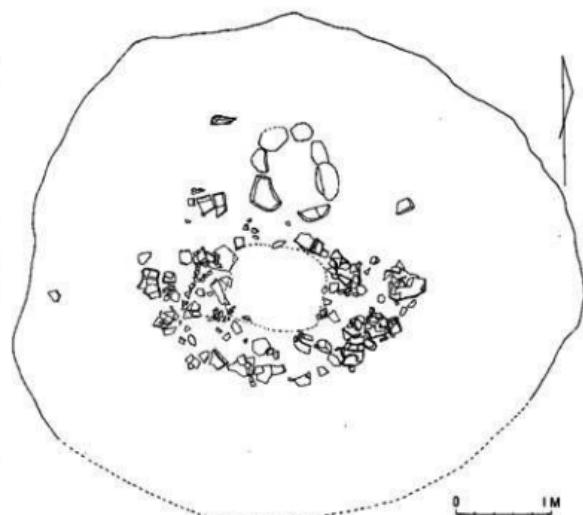
第8図 第2号住居址実測図

2) 第2号住居址

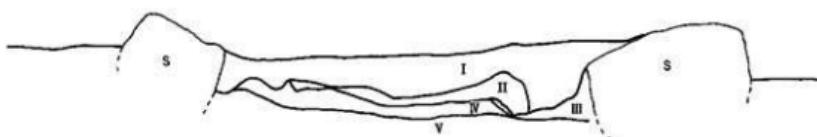
第1号住居址から北へ一段上がり4mほど離れて第2号住居址が発見された。この住居址は北側の壁の一部が落込みとして最初に発見されたが、西壁および北壁の一部が他の住居址と切り合っており全体のプラン確認には数日を過ぎてからであった。この住居址の特徴的なことは住居址ほぼ中央部に東西に長い菱形に土器が密集して置かれていたことである。土器は床面に並べられたような状況で出土し、復元した時にはほぼ完形の器が6点ほどになった。そして完形の土器の間にはこわれた土器片をばらまいたような感じさえ受ける。この土器集中箇所の東端には土偶の胸部のみが検出され、中央や西寄りには大型の有孔錫付土器が一個体置かれている。しかし第9図に見るように土器集中箇所の真中を後世に掘り返されてしまい、ここに位置した土器類がほ

とんど失われてしまつて
いたことは残念であった。
住居址のプランは東西約
6 m、南北5 m余の椭円
形を呈し北西の角は、第
6、9号の住居址と切り
合っており、第6、9号
の住居址より後に造られ
ている。住居址床面は北
と西寄りの部分が非常に
堅く、南側は傾斜で低く
なっているので壁の立ち
上がりも不明で床面もあ
まりはっきりしない。北
壁における高さは確認面
から40 cm でありやや急
な斜壁を呈している。壁
の下には周溝がつけられ。

5~10 cm の深さで、巾も平均10 cm 前後である。住居址内には十数個の大小のビットがあるが、
住居を形作った主柱穴は、P₁~P₆ と考えられる。主柱穴の深さは床面から30~55 cm で平均し
て深目になっている。又、住居址東側には深さ37 cm から61 cm の袋状のビットが5ヶ所並んで
検出されている。炉は中央やや北寄りに位置し、7個の平石で椭円形に囲まれて造られている。
住居の入口は南側であろう。



第9図 第2号住居址土器集中区分布図



第10図 第2号住居址炉址断面図

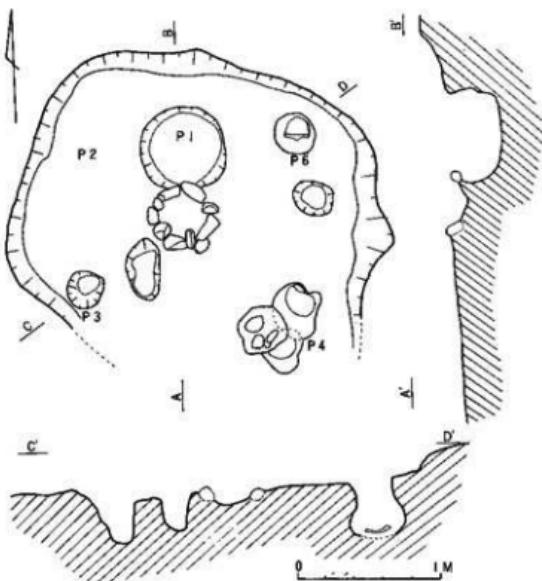
第2号住居址炉

層序説明

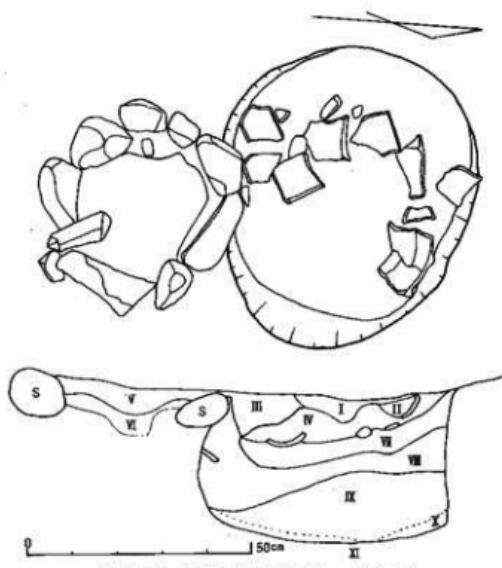
- 第Ⅰ層 紫褐色土層でローム粒・燒土粒・木炭を含む。
- 第Ⅱ層 紫褐色土層でローム粒を含む。
- 第Ⅲ層 黄褐色土層。
- 第Ⅳ層 ローム層・燒土。
- 第Ⅴ層 ローム層。

3) 第3号住居址(第11図)

拡張区の9-H、Iグリットに発見された住居址である。中央に小石を円形に並べて炉を造っている。一边が2m10cmほどの隅丸方形のプランで、住居址としては非常に小さな部類に入る。遺物は住居址の覆土を掘り下げる過程で発見されている。その中には土笛も含まれている。土笛は箕輪町においては2例目の出土である。床面はあまり堅くはないっておらず、南側は壁の立ち上がりが不明で



第11図 第3号住居址実測図



第12図 第3号住居址内ビット地層図

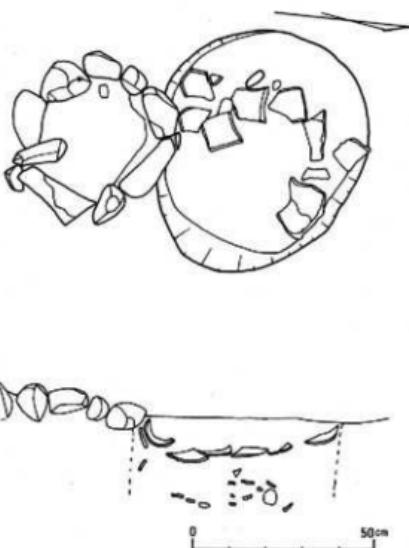
第3号住居址内 ビットA6.1

レベル標高 764.00

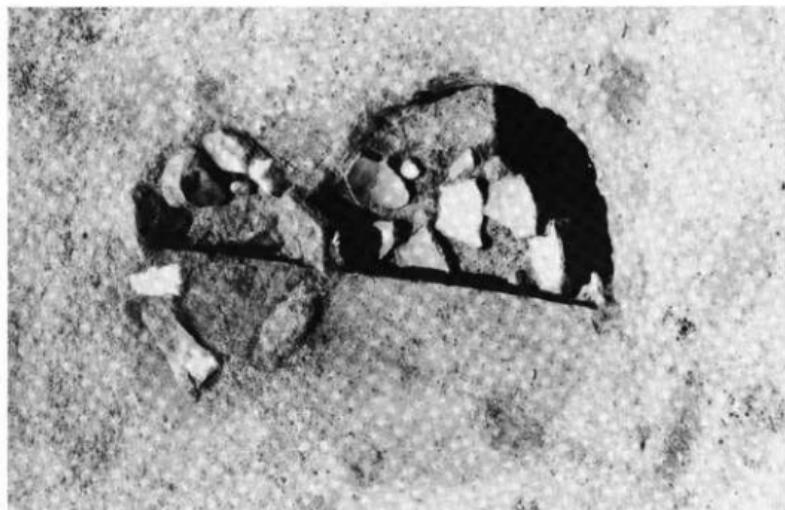
- 南北
- 第一層 暗褐色土層 ローム粒・炭化物をわずかに含む。
- 第二層 黒褐色土層 ローム粒・炭化物を含み、炭化物は、I層よりも多い。
- 第三層 1層よりも黄色味の強い暗褐色 炭化物粒を多く含みローム粒は1層に比して多い。
- 第四層 暗黒褐色 黑斑が無い。大きめのローム粒をかなり含む。
- 第五層 暗褐色土層 ローム粒及び焼土をわずかに含む。
- 第六層 喷出褐色土層 ローム粒をかなり含む。
- 第七層 黏つてあると思われるローム層。
- 第八層 黒褐色土層 ロームが「ブロック」とんでとんでいる。炭化物を多く含む。
- 第九層 黄色味の強い暗黃褐色 ローム粒を含む。
- 第十層 土層よりも堅く色調は灰層に同じ。ローム層。

あった。これはどの住居址にも共通することであるが、住居の立地が南が低い傾斜地になっているためである。炉址と接してピット1が検出されているが、これは第4号住居址の貯蔵穴と考えてよいと思う。(第13図)に見るよう土器がピット内にはば平らに並べられている。この土器も第4号住居址のものであろう。住居址東北の角にピット6がある。これは低部が袋状になりピット内部の壁も整えられていた。

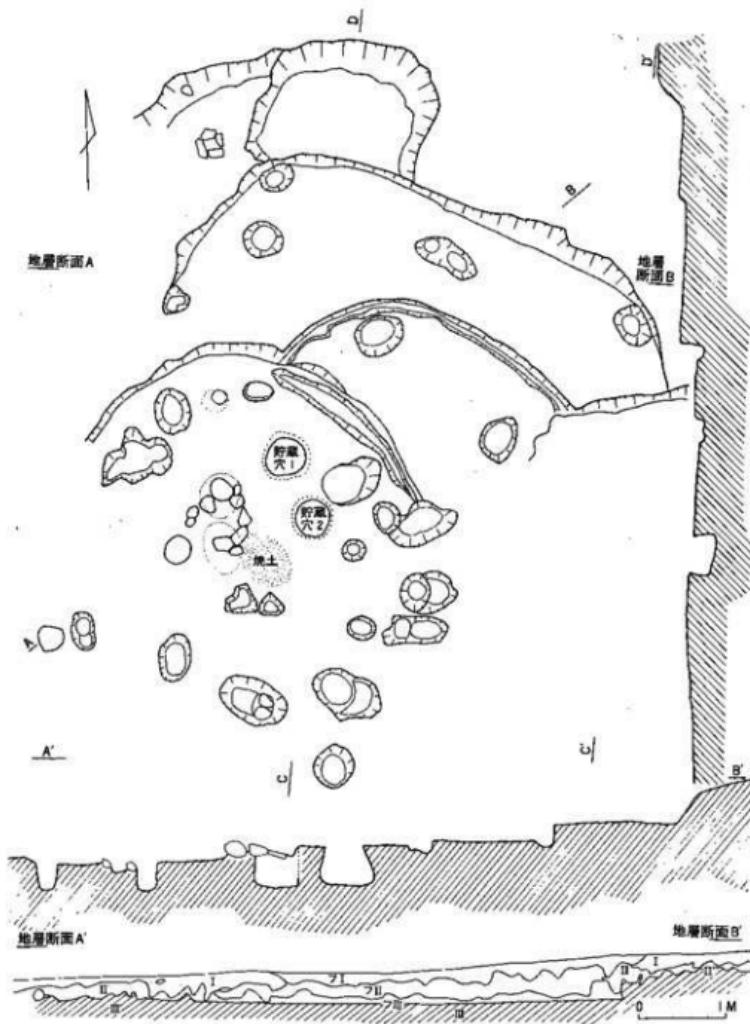
主柱穴はP₃、P₄、P₅とP₂の位置の4柱穴であったと予想されるがP₂の位置は発見できなかった。炉址の中より石錘が一個出土している。



第13図 第3号住居址ピット内土器出土状況



土器出土状況



第14図 住居址第1集中区実測図

住居址第1集中区

層序説明

- 第Ⅰ層 混乱された部分で、小さなロームブロックが入る黒褐色土層。
- 第Ⅱ層 混乱された部分で、ローム粒と褐色土の擾乱。
- 第Ⅲ層 ローム層。
- 第Ⅳ層 明るい褐色土層・ロームを多く含む。
- 第Ⅴ層 黒土層で柔らかい。
- 第Ⅵ層 ロームブロックを少し含む黒土層。
- 第Ⅶ層 ロームを少し含む黒褐色土層。

4) 住居址第1集中区

第2号住居址の西側に住居址の集中ヶ所が検出された。それは10, 11のH.L.Jのグリットを中心には5つの住居址が切り合っており、重なっている。住居址は3号住居址から階段状に4段になり6号住居址を5号住居址が切り、5号住居址を4号住居址が、4号住居址を3号住居址がそれぞれ切っている。それぞれの住居址の床面レベルの違いは第14図に見るようであるが、その傾斜は地表面の傾斜よりもやや少くない。H-Lグリットにおいては遺構が西側に張り出していたため1グリット半(3m)拡張区を設定して調査を行なった。特に住居址が重なり合ったI-10, 11グリット内は、柱穴、袋状ピット、炉址等が密集しそれ等の状態がどの住居址につくものか判断に苦しんだ。そのため各住居址のプラン予想を行ない一つづつの住居址を取り出し検討してみた。

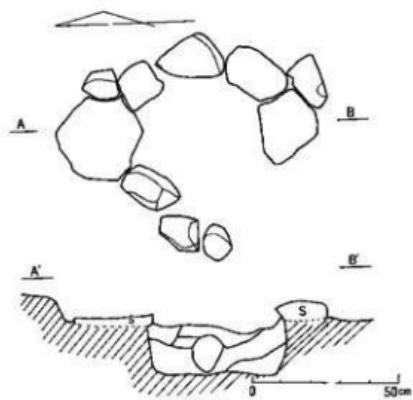
イ) 第4号住居址(第4号住居址取り出し図参照)

I-9, 10グリットを中心に南北に長い楕円形を呈したプランであったと想像した。本遺構は第2号と第3号の住居址によって切られているため、壁は北側の部分のみであり全体の約4分の1くらいしか残っていない。床面はほぼ平らで非常に堅くなっている。貯蔵穴と思われる袋状ピットが二つ並んでいるが、4号住居址につくものは貯蔵穴と考えたい。主柱穴はP₁~P₆の6本と考えたがどうであろうか。柱穴は壁に平行に小判型に掘られたものが多く底部も平らなものが多い。炉址は中央やや北寄りに位置し十個余りの河原石によって囲まれている。炉址の南西寄りの部分が、第3号址によって切られ、石が少し取り除かれている。この炉址は第5号住居と第6号住居址の柱穴の上に造られた炉址であるため、内部の土は柔らかくなっていた。住居址の平均の標高は、763.93mである。

第5号住居址(第5号住居址取り出し図参照)

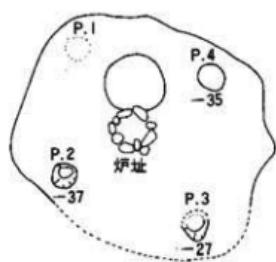
本住居址は第2号と4号の各住居址により切られており、全体の約5分の1くらいの床面しか検出されなかった。プランは一辺5m弱くらいの隅丸方形を呈していたものと推定する。この住居址に用いられたと思われるピットをP₁~P₄とした。位置、形、底部のレベルから考えて最も

共通性がある。P₁は床面からの深さ62cmになっている。形はみな壁に平行するように小判型をしており、4柱穴共しっかりしたピットである。住居址床面の平均標高は764.03mである。

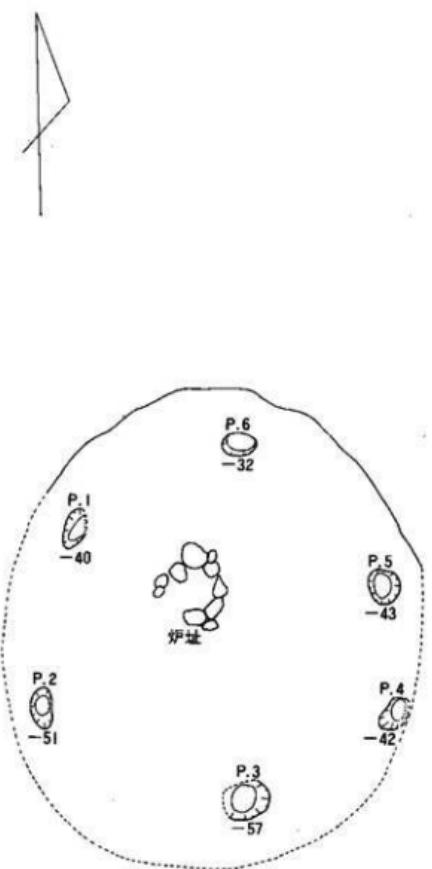


第15図 第4号住居炉址地層断面図

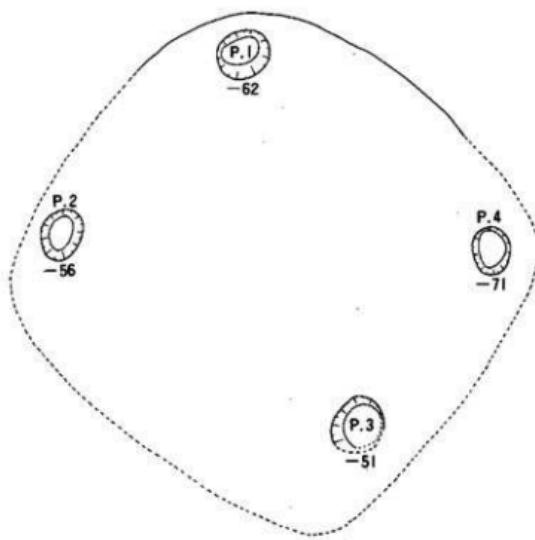
第4号住居址 炉	
水系レベル	340.0cm
レベル標高	767.385
層序説明	
第Ⅰ層	黒褐色土層 柔らかく黒味が強くロームが少し入る。少々焼けている。
第Ⅱ層	茶褐色土層 焼土が多くややかたい。ロームが含まれている。
第Ⅲ層	茶褐色土層 IIより明るくロームを多く含む。焼土を含む。
第Ⅳ層	ローム層 上部は赤く焼けたローム。
第Ⅴ層	赤褐色土層 焼土を含む柔らかな層である。
第Ⅵ層	茶褐色層 Iに近く柔らかい。



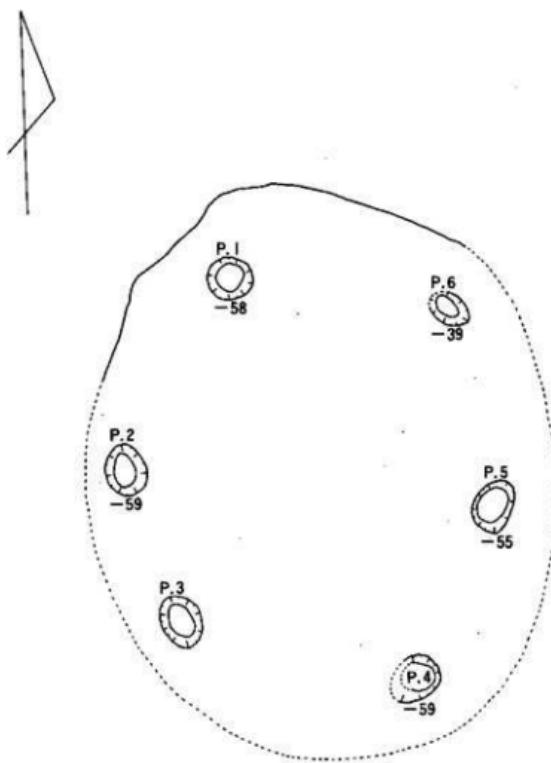
第28図-1 第3号住居址取り出し図



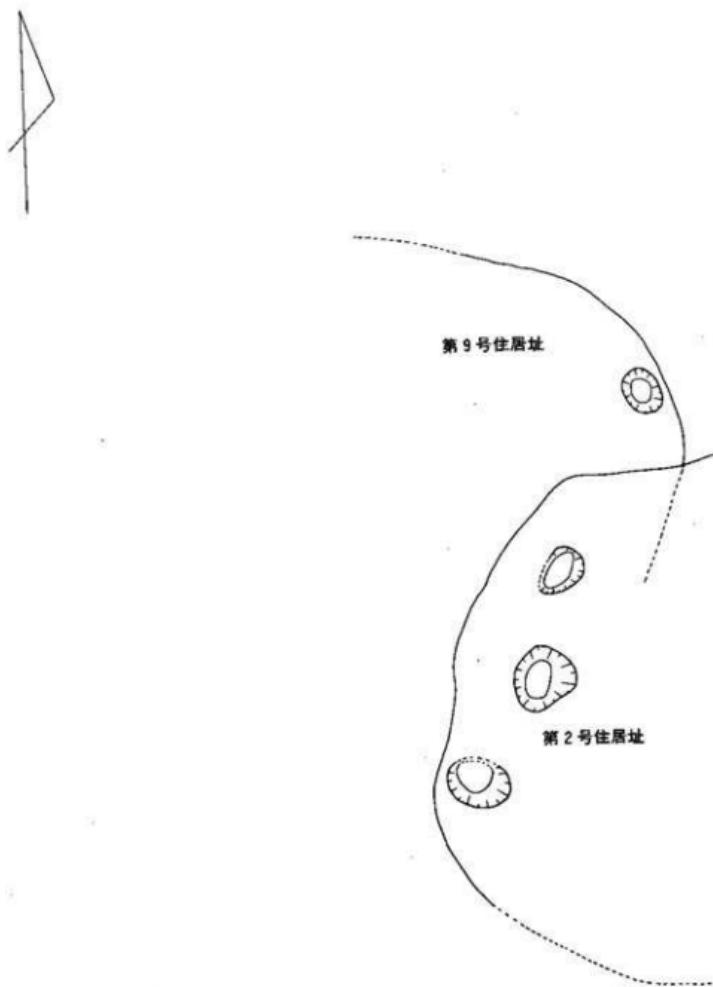
第20図-2 第4号住居址取り出し図



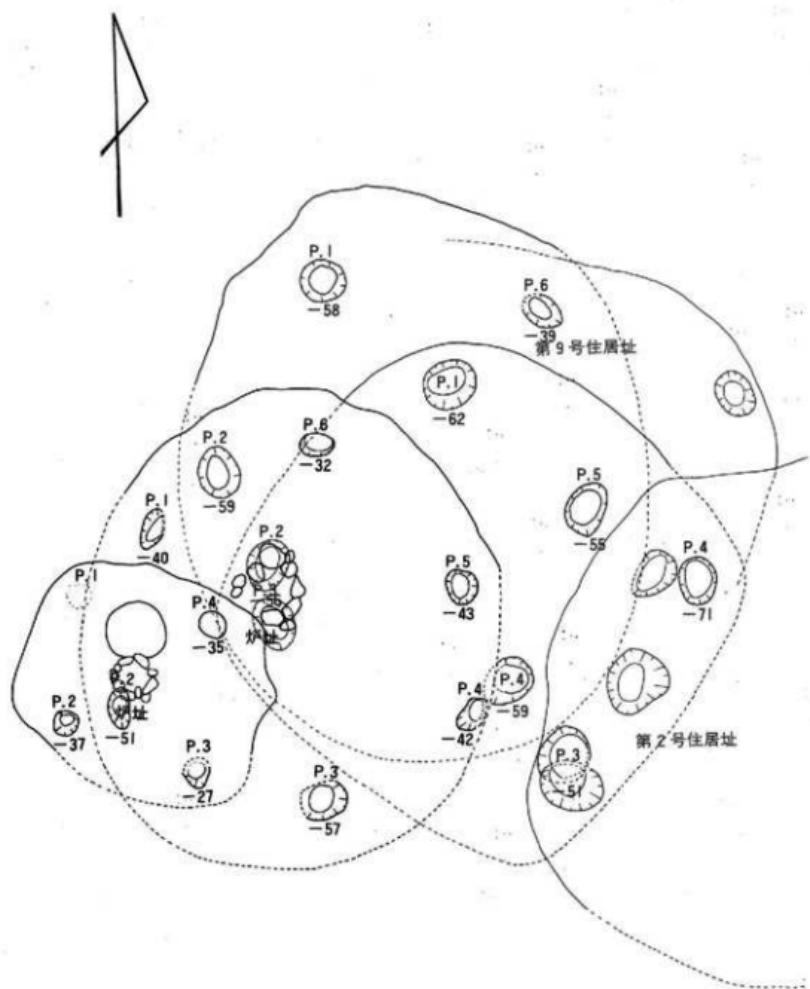
第20図-3 第5号住居址取り出し図



第20図-4 第6号住居址取り出し図



第20図-5 第9号住居址取り出し図



第20図-1 第3号住居址取り出し図

第6号住居址（第6号住居址取り出し図参照）

本住居址は第9号住居址と床面のレベルがほとんど同一で、初めは、第6, 9の住居址は一つのものであろうと予想していた。しかし調査が細部に及んで精査の段階で二つの住居址が切り合っていることが判明した。第6号住居址も北西部の一部しか残らないため、第6号住居址取り出し図のような形を図上復元した。柱穴はP₁～P₆の6柱穴が予想される。P₁は床面から53cmの深さを有している。6柱穴のうちP₃を除いて底のレベルが4cmしか違わず深さが一定している。

P₃は第4号住居址の炉と同じ位置である。炉址は4, 5の住居址の製作時において取り除かれているため確認されなかった。住居址床面の平均的標高は764.33mである。

第9号住居址（第9号住居址取り出し図参照）

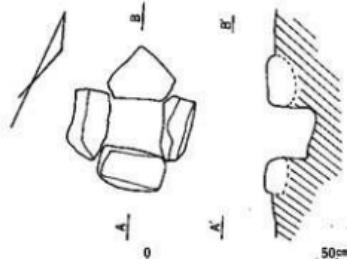
本住居址は第6号住居址と同一レベルの床面をもつ住居址である。壁も床面もほんのわずかしか確認できないため、住居址全体の推測は困難である。床面の標高は第6号住居址と同じである。

5) K-9 グリット内石組実測図（第16図）

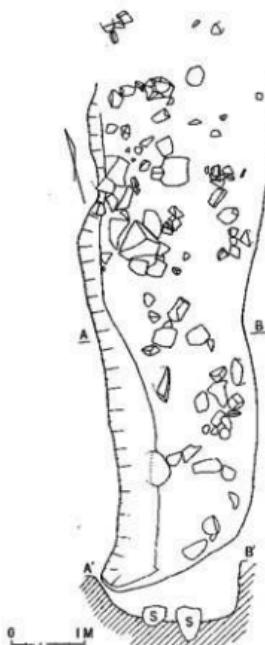
K-9 グリットの東北隅寄りに4個の石を組んだ小さな炉址状の遺構が発見された。16図に示したごとく東西と南側は長方形の石を用い、北側は三角形の石を用いている。石組内部は12cmほど深い柔らかな土が入っており、焼土などは見られない。炉としての使用は考えられず、何か特別の意味をもって何かの貯蔵用にでも用いたのであろうか、今後類例を待って研究しなければならない。

6) 溝状遺構（第17図）

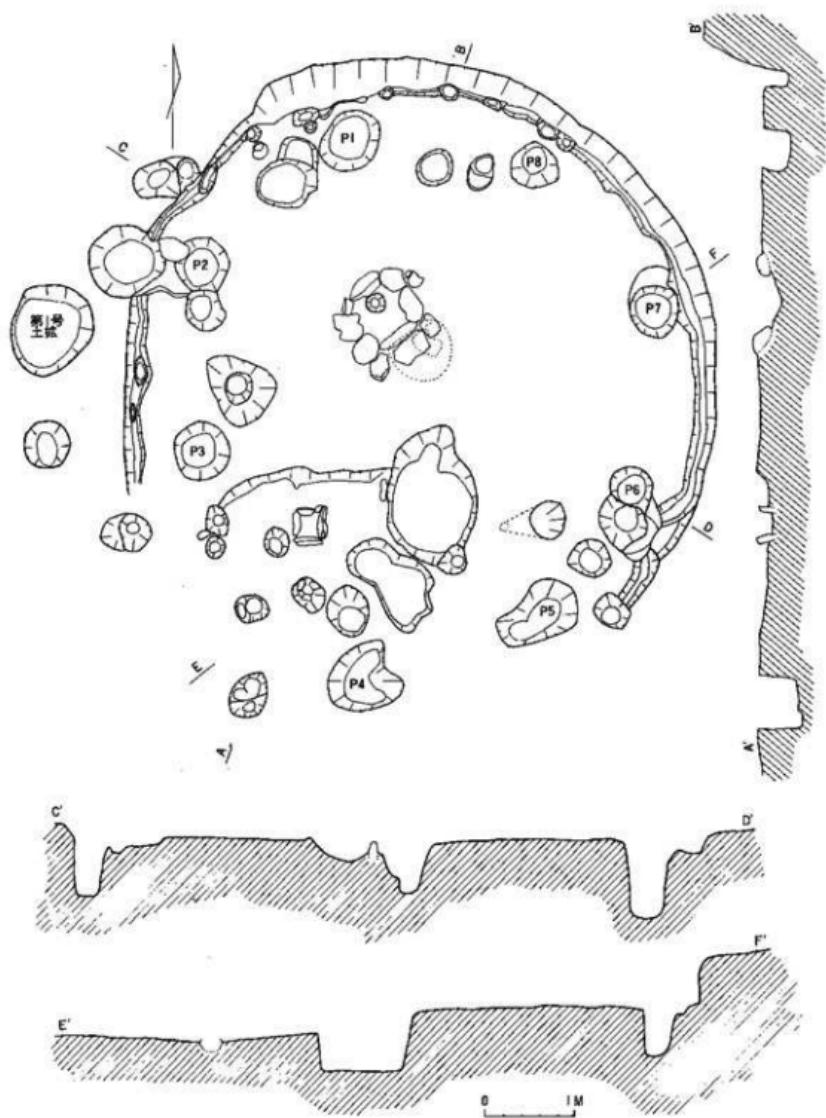
本調査区の東南の角に発見された遺構である。溝は南北に長く続き、頭大の石が数多く入っている。溝の中より灰釉陶器片や土師器片などが花崗岩の風化した砂に混入して出土している。これらの遺物は上部の遺物が流れ込んだものであろう。この溝状遺構は第二調査地区に発見されたものと同一の可能性がある。溝は上に行くほど平らになり巾が広くなっている。石は花崗岩が多い。



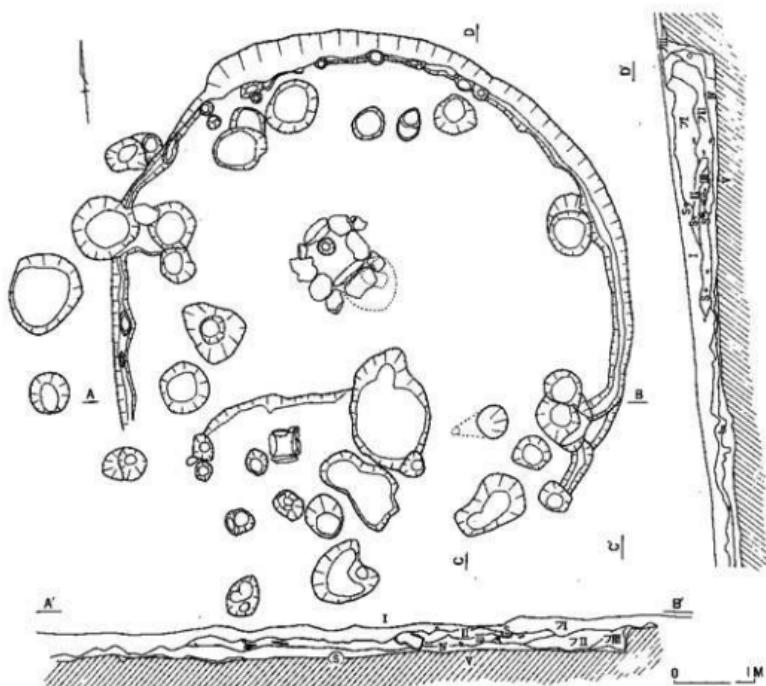
第16図 K-9 グリット内石組実測図



第17図 溝状遺構実測図



第18図 住居址第2集中区実測図



第19図 住居址第2集中区地層断面図

層序説明

- 第Ⅰ層 黒褐色土層で耕作土 ロームブロックがわずかにはいる。
- 第Ⅱ層 黒褐色土層で炭化物とロームブロックを含む。暗い色をしている。
- 第Ⅲ層 黒褐色土層でロームブロックが入りⅠ層より明るい。
- 第Ⅳ層 黑褐色土層 ロームを多く含み、明るい褐色をしている。
- 第Ⅴ層 黑褐色土層 ロームが入り、鐵土も少し入る。炭化物も含む。
- 第Ⅵ層 黑褐色土層 ロームブロックを多く含み、ややかたい。少し砂粉を含む。
- 第Ⅶ層 黑褐色土層 ロームブロックを多く含み、明るい色をしている。
- 第Ⅷ層 ローム層。

7) 住居址第2集中区

13, 14-K,L,M の6グリットを中心には各住居址のプラン、柱穴などは判明できないので、各住居址を一つづつ取り出し図示した。第19図の次のページに示した5枚の図である。この集中区はこの中における最も大きな住居址である第8号住居址が最初に検出され、その後の調査で、切り合った状況などがしだいに判明してきた。この集中区においては埋葬坑をもつた第10号址が最初に造られ、次に第7号址、次に第11, 12号址があり最後に第8号址が造られたという順序であろう。第1集中区にも同じことが言えると思うがこの傾斜地が非常に居住性に富んでいたということと、一旦掘り返された場所は凹地になっていたであろうし、掘るのにも柔らかく楽であったと思われる。そ

のためあまり年月が経過しなくて繰返し住居が建てられたのであろう。

イ) 第7号住居址(第7号住居址取り出し図参照)

13-KL グリットを中心に位置するこの住居址は第8号址の床面より約10cm前後低くなり、第10号住居址の上に造っているという状態である。取り出し図においては4柱穴による円形の住居址のごとく推定したが、壁の一部分も確認されないので、まさに推定復原である。床面は北の一部を除いてほとんど貼り床状であり床面はロームと黒土の混合したものが堅められていた。主柱穴はP₁～P₄と想定した。4柱穴共に底部のレベルは4cmしか違っていない。P₂～P₄の3柱穴は他のピットと交差しており形、大きさ共に推定復原した。それによると、4柱穴共にはば円形で上部における直径は30cm前後である。柱穴底部、柱壁共に堅いローム面になっている。炉址は中央やや北寄りに位置し、4つの扁平な自然石を横にして立てて四辺を囲んでいる。その立て方にも上がり少し開いた逆八の字状になっている。床面と炉石のレベルは炉石が5cm程度高くなっている。石巾の7割ほどは床面下に埋め込んで炉を造ったと思われる。床面の標高は764.91mである。

ロ) 第10号住居址(第20図-5)

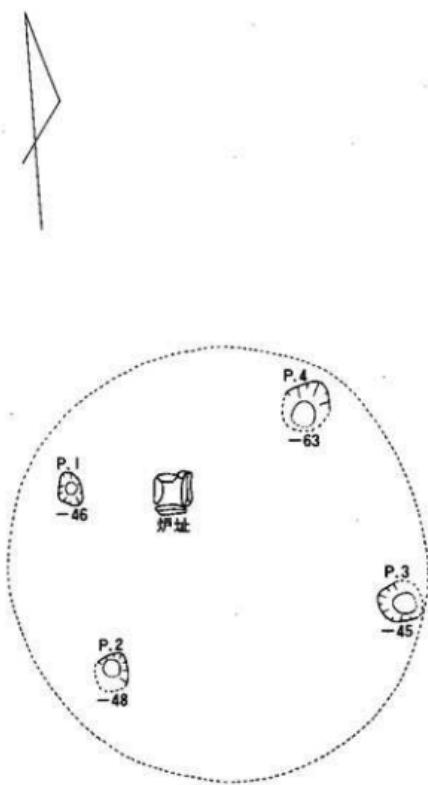
13-K グリットを中心に検出された住居址で、第7号住居址の内にほとんど含まれる。北側の一部の壁のみ確認されその部分の壁高は16cmを計る。北に残った壁より住居址の全形は図上において推定復原したのが隈丸方形を呈する図である。この住居址に付くと思われる柱穴はP₁、P₂、P₄の3柱穴である。3柱穴の底部のレベルはP₂とP₄とで14cmの違いがある。柱穴は直径20～30cmで円形である。P₃の位置に柱穴があると予想されるが精査の段階で見落したと思われる。炉は底部のない土器を使用した埋廬炉であり、深さは21cmである。住居址の床面標高は764.73mである。

ハ) 第11号住居址(第11号住居址取り出し図参照)

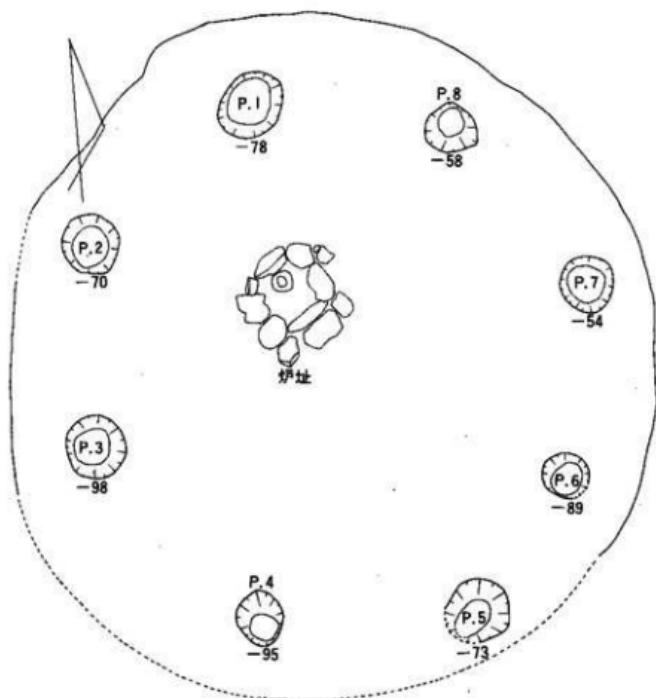
第8号住居址の西側半分ほどと重なって位置している。第8号住居址の床面精査中に炉の位置と推定される場所の焼土の検出において住居址としての推定を行なった。その為本住居址の確定床面積は不明であるが、第8号住居址の床面とはほぼ同じか、少し高い程度であろう。壁もほとんど確認されずプランは全く推定である。第8号住居址の北壁が途中で切れる位置があるが、この部分が第11号址との交わる部分であると予想する。主柱穴は参考図のごとくP₁～P₄の4柱穴とした。P₁、P₂、P₄においては柱穴の底部のレベルが6cmの違いで床面からの深さは51～63cm前後である。P₃においてはこの柱穴位置は第12号住居址の炉址の中心にあり炉址の焼土の大半が取り除かれている。又本住居址の炉址は第12号住居址のP₂によって中央を掘り込まれており柱穴周囲に焼土が残っている状況である。炉を形成した石は第8号住居址床面の製作時に取り除かれたものであろう。残った焼土も平らになり床面と同じく堅くなっている。本住居址に伴うと判断される遺物は不明である。

ニ) 第12号住居址(第12号住居址取り出し図参照)

第8号住居址とはほぼ重なるような位置にある。東壁はほぼ同一であると予想され、プランも柱穴の位置からの予想で図のごとく復原した。炉址をほぼ中心にした円形プランで柱穴はP₁～P₅の5ヶ所であろう。P₃、P₄、P₅は床面から55～65cm前後でありP₁は浅く、P₂はそれより深い。



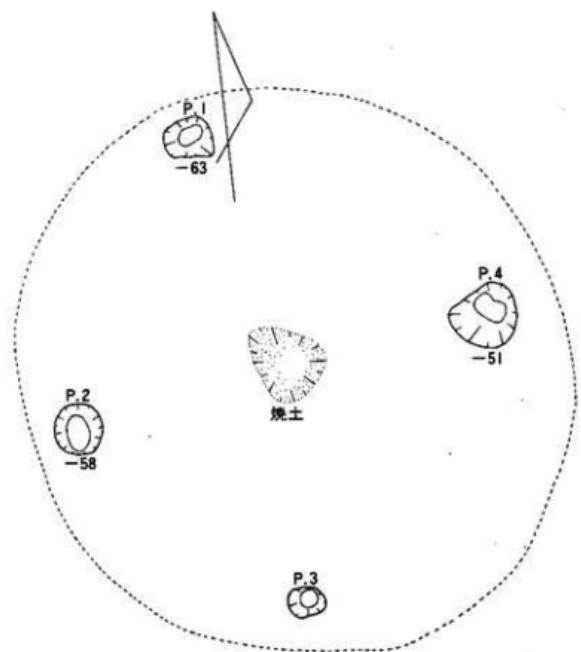
第20図-6 第7号住居址取り出し図



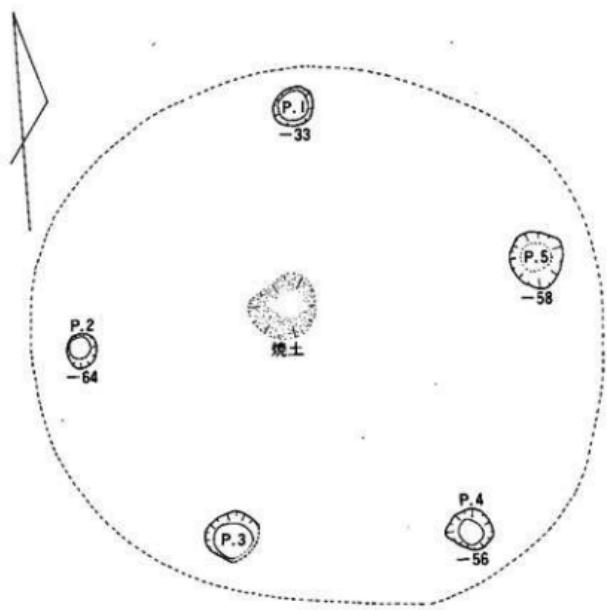
第20図-7 第8号住居址取り出し図



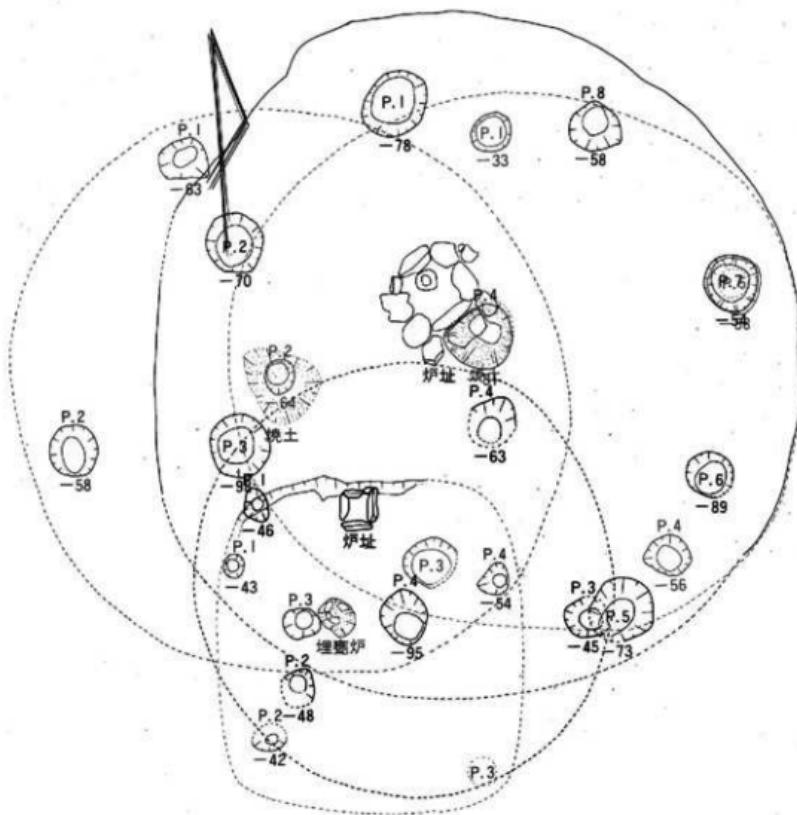
第20図一 第10号住居址取り出し図



第20図一 第11号住居址取り出し図



第20図-10 第12号住居址取り出し図

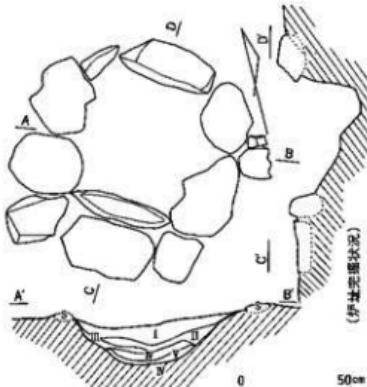


第20図-6 第7号住居址取り出し図

炉址は第8号住居址の炉址を接する位置にあり、この炉址は第11号P₄によって中心を掘り込まれている。そのため焼土もわずかであり炉の形態はほとんど留めない。床面は第8号住居址とはほぼ同一であると思われる。

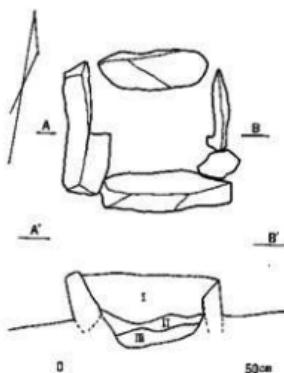
木) 第8号住居址(第19図 第8号住居址取り出し図参照)

住居址第2集中区において最も新しく造られたのが第8号住居址である。傾斜地に造られる住居址の特徴として上壁はきわめて高く、下側は壁の立ち上りがほとんどない。第8号住居址も北壁は96cmの高さをもったかなり急な斜壁である。壁の下部には深さ10~15cm巾15~20cmの周溝が巡っており周溝の所々に補助柱穴がある。プランは直径7m弱の円形を呈しており、住居址としては大型の部類に入る。床面は長時間使用した床らしく凹い叩きになっておりほぼ平らである。第7、10号住居址の部分は貼床のためやや弱さが弱い。柱穴はP₁~P₈の8本であろうと予想するがP₅かP₆かはぶかれることも考えられる。柱穴は床面より測定して浅いもので42cm、深いもので85cmと深さにかなりの差がある。底部は一応に固く平面に近い。炉址は中央よりやや北に寄り、方形の石組み竪穴炉で炉石はほとんど残っている。掘り込みは40cmほどで中央より北に径20cmのピットがある。掘り込み内には焼土が堆積している。炉内よりはほとんど遺物の出土はない。第20図に見るようすに本住居址内からは多量の土器が出土している。土器そのものについての検討は別項にて述べることとし、ここでは出土状況について概要を記す。本住居址の場合には第2号住居址の土器集中出土状況のように床面に並べられたものとは違い住居址が廃絶され、それが自然に埋没して凹地になった所へ、一括された土器類を投げ込んだような状況である。そのため、住居址ほぼ中央から低い南側に土器が集中し、床面上15~20cm上って土器が重なって出土している。このような遺物の出土状況を一定のパターンでとらえる方法も見られる。



第21図 第8号住居址炉址地層断面図

層序説明	第I層 黒褐色土層 第II層 黑褐色土層 第III層 黑褐色土層	柔らかくわずかにローム粒を含む。 ロームブロックを含み焼土粒が少し入る。 赤褐色土層
層V層	赤褐色土層	ローム粒で赤く焼成化している。
層VI層	ローム層	ローム層で少し赤化している。
層VII層	ローム層	ローム層。



第22図 第7号住居址炉址地層断面図

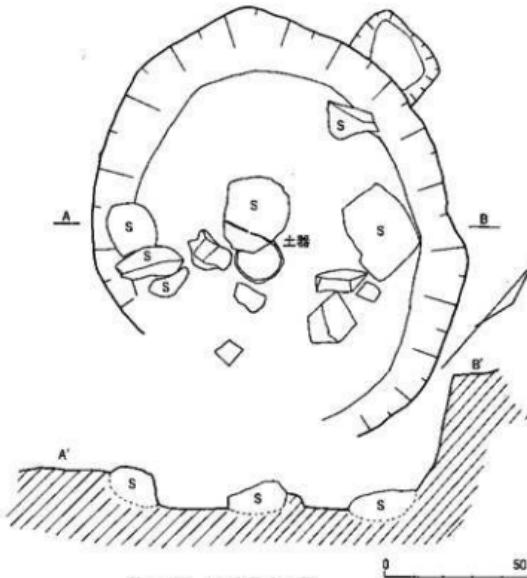
層序説明	第I層 黒褐色土層 第II層 黑褐色土層 第III層 茶褐色土層 第IV層 ローム層
層I層	黒褐色土層。
層II層	黒褐色にやや茶を帯びた層。
層III層	茶褐色にロームを含む層。
層IV層	ローム。

8) 土塙墓

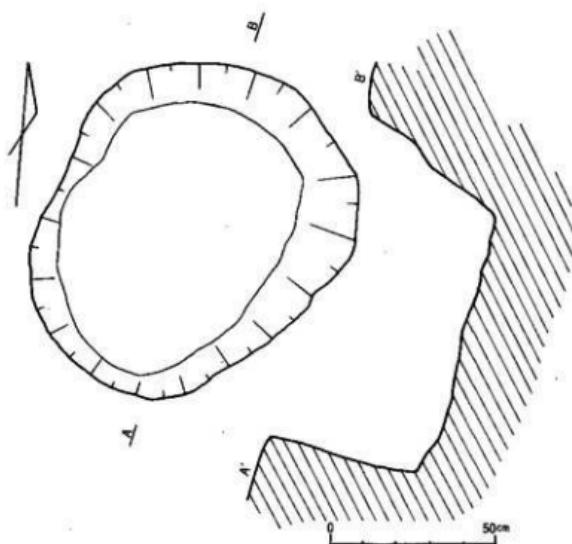
第8号住居址の西側M-11グリットの位置に検出された遺構である。東西約2m、南北1.2mの楕円形を呈し、底部はほぼ平らである。北壁は急な傾斜で高くなり、内には頭大の自然石数個と拳大の石が10個程度入っている。底部はほぼ平らに整えられ、ある程度の同さを有している。又ほぼ中央に土器(46図55番)が正位に置かれている。この土器の他には出土遺物はほとんどない。形や底部を整えてある状況から検討して土塙墓ではないかと想像する。時期は一帯の住居址が造られた時と同じであろう。又内に入っている石は自然石で炉の石組に使用されているものと同じ石質である。

9) 土塙(第24図)

第8号住居址の西側に土塙墓と並ぶように土塙が検出された。南北に長い楕円形でローム層に掘り込まれており、底部はほぼ平らである。壁や底部は少し整えた様子を伺うことができる。土塙内から出土したものはない。



第23図 土塙墓実測図



第24図 土塙墓断面図

第3節 遺物

1) 土製品（第25図）

イ) 土偶 本遺跡における土偶は5例を数える。第25図6-10である。5例共に欠損品であり6.8は頭部、7.9は足部、10は胴部である。6は第4号住居址床面上からの出土で、首で折れており、顔面も右耳の部分が欠損している。顔は頭部が尖った三角形に近い形をしており、眉、目口は沈線で現わされ、目は心もちつり上っている。眉は二重になり、口の左右と下には沈線でひげを思わせるような線が施されている。後頭部は三角形に大きく造られ髪形を想像することができる。頭の上部と後部には、横に貫通する穴があり、耳の後にあたる位置に縦に貫通する穴がある。これ等の穴は直径3~4mmで、この穴にひもを通し土偶をつるしたのではないかと思われる。粘土はきめの細かなものを使い、雲母を少量混入している。焼成は良好でしっかりとした土偶である。8の土偶も6と同じく頭部のみで首下が欠損している。顔面はほぼ平らで、頭上部が一部欠損している。目尻りがやや下がり、口は大きくまるく開き、何かをさけんでいるかのようである。顔の輪郭は沈線で描かれ髪形を現わしている感じである。耳にあたる部分に穴が貫通しており、頭の上部、後頭部の計4穴が認められる。6の土偶と同じくひもで土偶をつるすためのものであろう。破損した首の断面には、中心部に径4mmほどの円形の穴があり、製作の時に「しん」を入れたものと考える。1:目は細かく雲母が多く混入している。後頭部の形やつるすための穴の位置など、6, 8は共通点の多い土偶である。10は第2号住居址床面より出土したもので、頭部と胴下部を欠損し、板状に製作された胸や胴の側部に翼をひろげたように両手が張り出している。胸には乳房が突き出ているが一方が欠損している。胸部から腹部に下がる正中線は隆線で表わされている。又、乳房の両側には二~三本の沈線が垂れている。胴部側面は三本の沈線とそれに直角になるように刺突された文様が連続している。背中の部分は右肩より左脇に斜めに二本の沈線が走り、背中央やや上部には人面を思わせるような文様が施されている。胎土は細かな小石と雲母を少量含み、欠損している首部と胴部の縫合面には中心に径3mmの楕円状の穴があり、製作時に「しん」を入れたのである。7, 9は土偶の足部である。9は右足で、足裏の長さ43mmで、平らになっている。足指から甲にかけて數本の沈線が施され足指の状況を表わしている。11-Hグリットの出土である。7は左足で現長42mmほどであるが本来は50mm余あったものと思う。足の甲は盛り上がり厚味がある。両方共に良質の粘土を使い中に雲母が混入している。

ロ) ドーナツ状土製品（第25図1）

第4号住居址の炉を精査中に発見したものである。図に示すように形はドーナツ状をしており大きさは85×73mmの楕円形で、一面が平らで断面は三角形に近い形を呈している。平らな面を下にして置くと安定感がよい。製作には粘土ひもを円形にして指で押えている。内側には指紋が残り、整形を指で行なったことを証明している。使用目的を推測してみると、器台のように器をのせて安定させるためのものという考え方、出土が炉址中からということから考え、煮炊の器が炉の中で傾かないようにするための台か、しかし器の底部をささえるには小さすぎる感じもある。その他として装身具として、プレスレット的な使用や、信仰的な行事に使用されたのではないかという二、三の推定をしたが、いかにも出土例が少なく、報告例もないため今後同類の出土を

待って研究したい。

玦状耳飾（第25図2、3）

2は第8号住居址より出土したものである。約半分が欠損しているが、形の復原はできる。切り込み面は凹凸があり焼成前に形を整えたと考える。3は第7号住居址覆土から出土している。2とほぼ同型で2、3共に細かな粘土を使用し焼成も大変良好である。

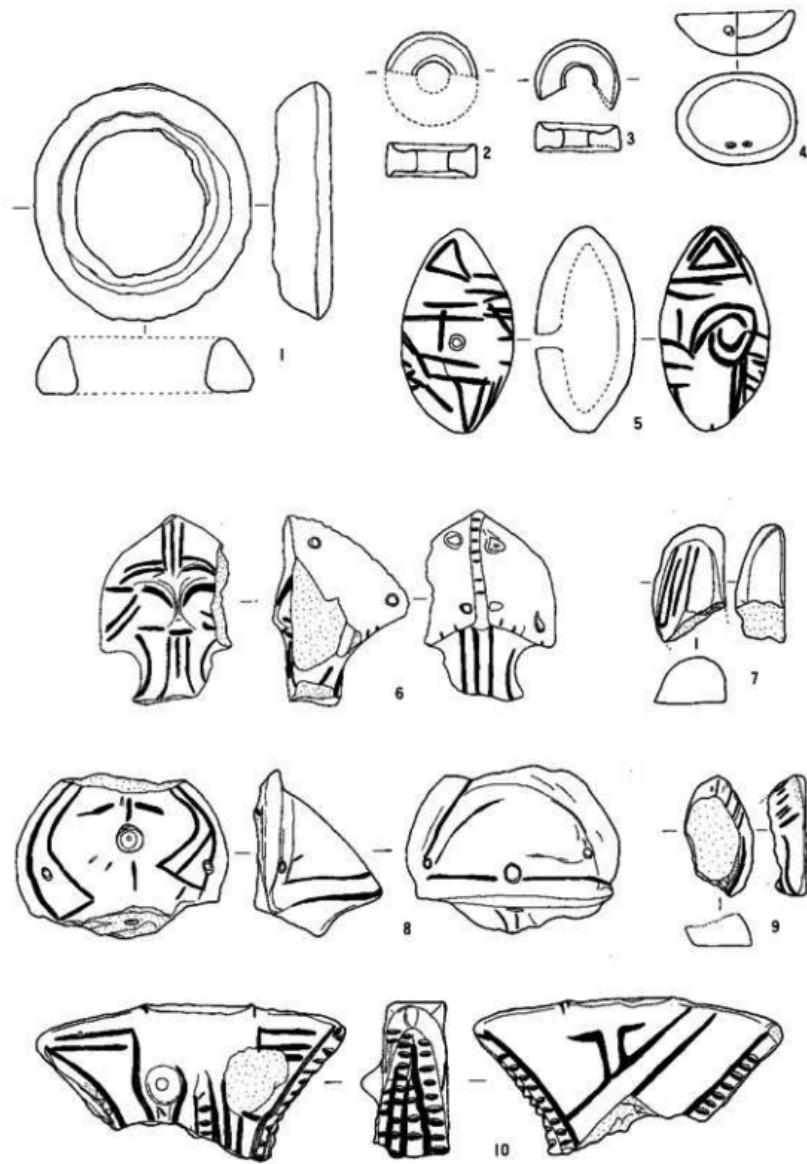
ハ) 土 笛（第25図5）

第3号住居址覆土から出土したものである。出土時には長軸に添って二つに割れていた。長形71mm、胴部最大径39mmで、胴部中央に径4mmの穴がある。中空で器厚は6~7mmである。穴の周囲は直線の沈線で不定形の文様が施されている。穴の裏側には二本の沈線で円が描かれているが何を表現しているかは不明である。土笛の出土例は全国的にみても数はそう多くないと考える。この土笛について石守氏（注）によると2種7形態に分類し、箕輪町福与大原出土のものを「箕輪タイプ」としている。本出土例もほぼこれと同タイプであり、ラグビーボール状のものである。今回の出土により同タイプのものがあまり離れていないところから二つ出土したことは意味あることであり、今後使用目的などについて研究したい。

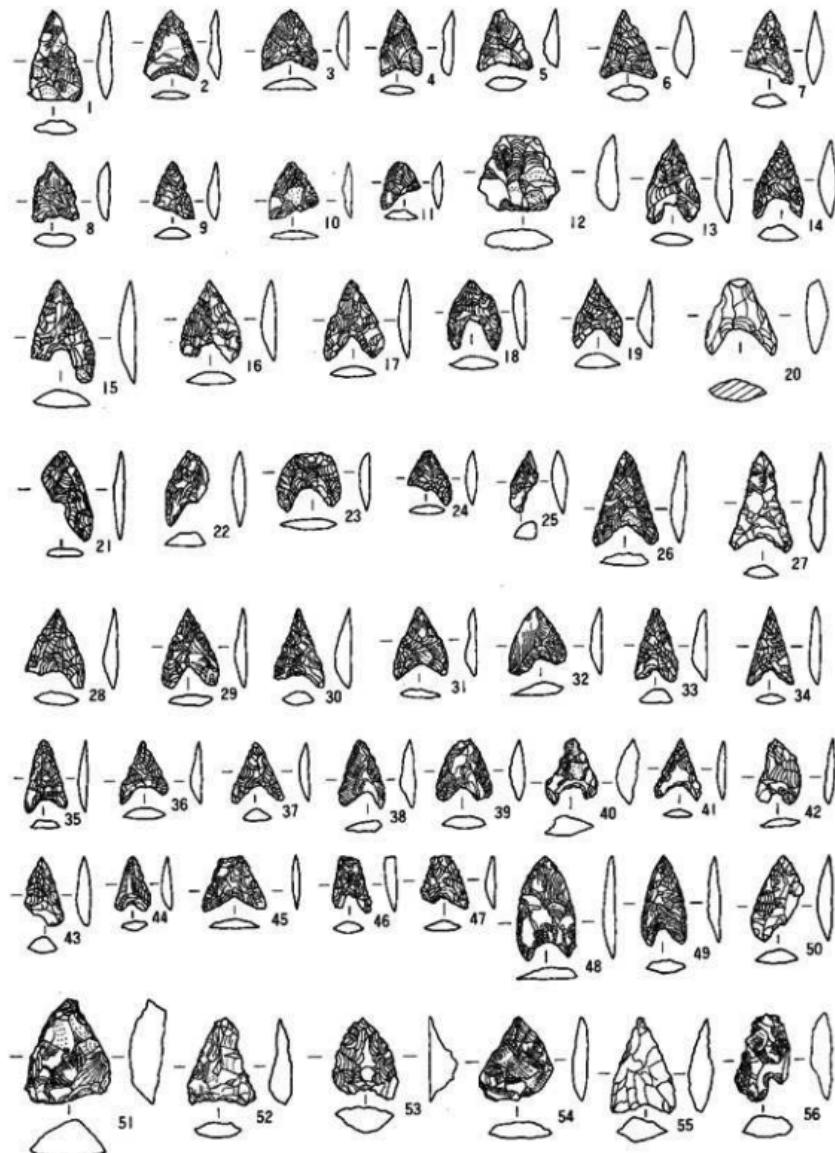
ニ) 有孔小皿土器（25図4）

9-I グリットからの出土で、43×32mmの楕円形で深さ7mmのスプーン状の土器である。図に示すように口縁より3mm下がった位置に6mmの間隔で2穴ある。穴の大きさは1.5mm程度である。使用目的であるが、この穴にひもを通して柄をしばり付け、スプーン的な利用をしたのか、又ペンダント的なものか、今後類例を待ちたい。

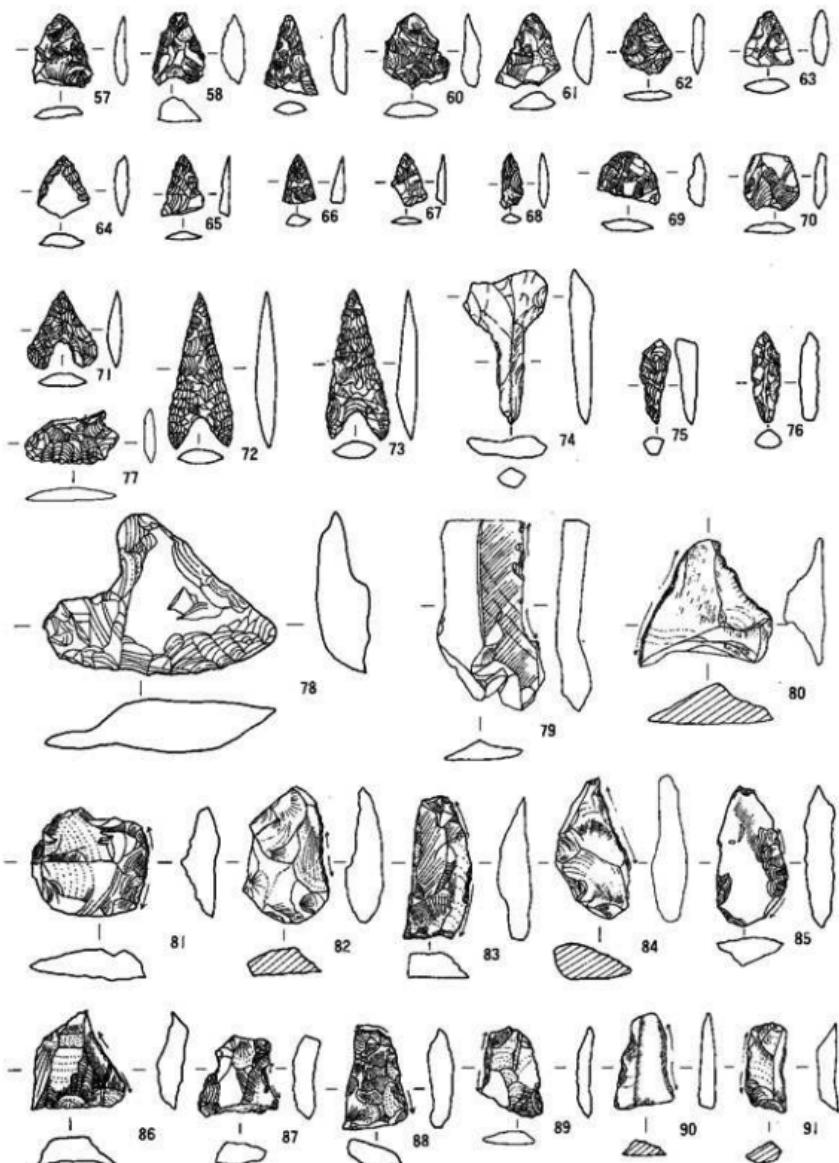
（注1. 長野県考古学会誌1980・6、原始古代楽器の考古学的研究より）



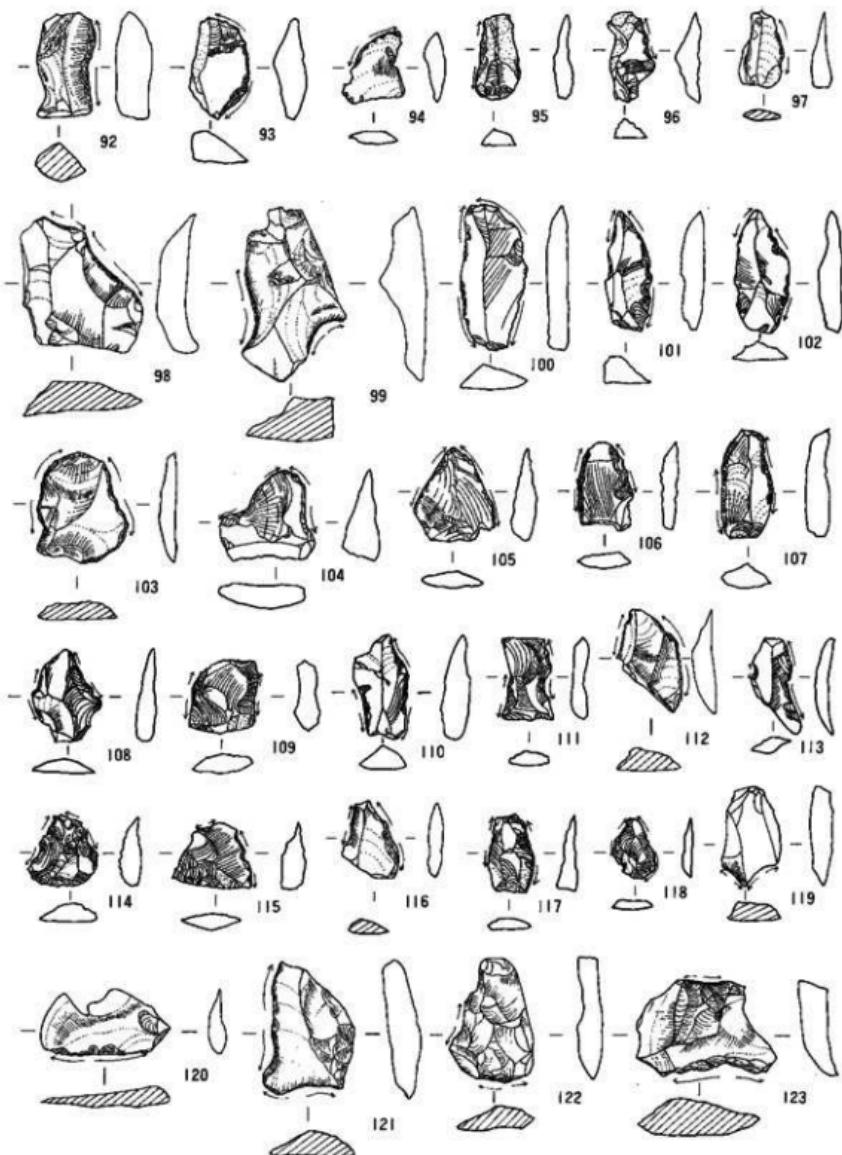
第25図 土製品



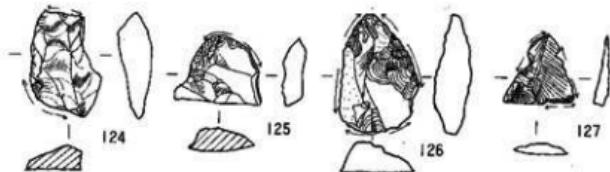
第 26 図 石器実測図(1) 御射山遺跡第一地区石器



第27図 石器実測図(2) 御射山遺跡第一地区石器



第28図 石器実測図(3) 鶴射山遺跡第一地区石器



第29図 石器実測図(4) 御射山遺跡第一地区石錐

2) 石 器

出土石器についての概要

本調査において石器として取り上げたものは総数197点である。このうち黒曜石を原料としているものが、全体の60パーセントを占めている。これ等の器種は石錐、ドリル、スクレイバー類が主である。又、岩石を材料とした石器も数多く出土している。この岩石を材料とする石器もいろいろに分類できるが、まず、人間が道具や武器として手にしたままの石（自然石）を利用している場合が考えられる。今回の調査において出土したものの中にもこうした自然石をそのままの状態で道具として使用したものが多く見られる。次に、使う目的によって石の形を変えてからに道具とする場合、この時石器ができるコースとして二通り考えられる。一つは、母石となる石塊を剥離して、剥片を取り除き、残った石の芯を利用して作られた石器（核石器）、他の一つは、石塊から剥片を打ち出しそれをさらに調整して道具として使用する場合（剥片石器）とがある。打製石斧を見る限りでは、母石の外周面を残しているもの（剥片石器）が多く、一つの石塊から一つの石斧を作り出すようなことは少なかったと思われる。そのように調整された石核及び剥片は使用目的によって様々に変えることにより各種の名前を与えられている。とにかく縄文人それ以前より長い間、石は重要な道具であり武器であった。この石器を様々な角度から考察することにより、当時の人々が石器をどのように作り出し、どのように使用したかが解明されていくと考える。

石 錐

石器のうち最も多のが石錐であった。これを大きさ、形などから8類に分類した。

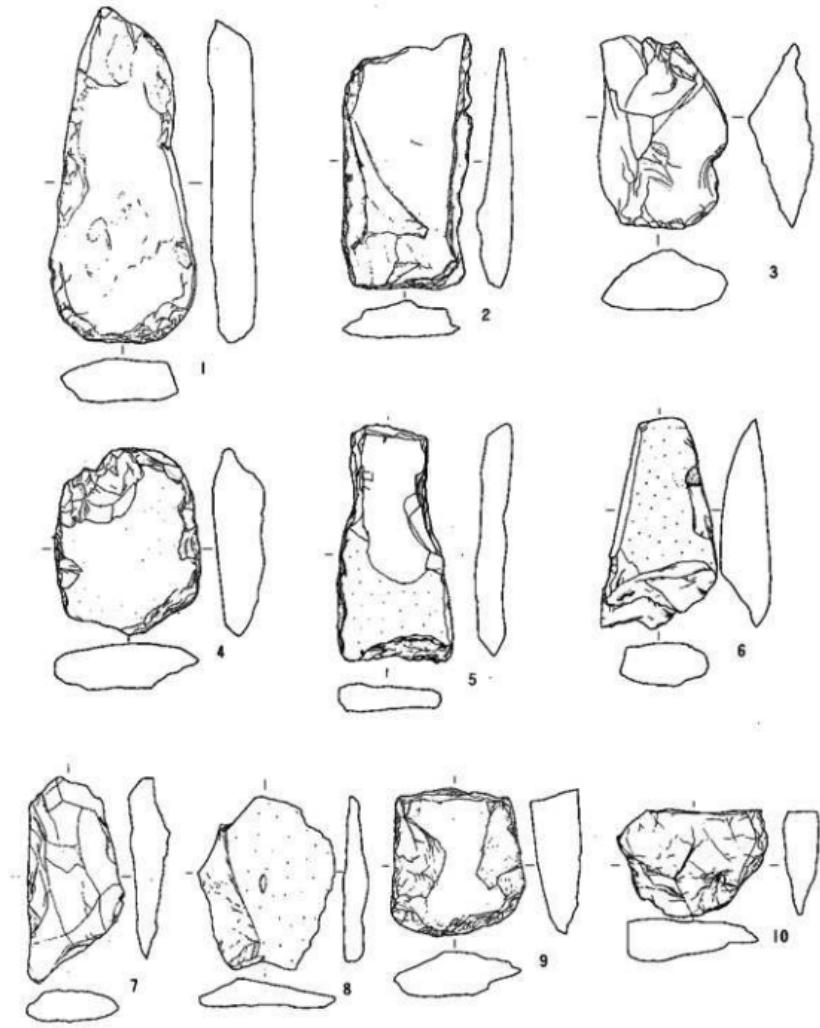
出土したものすべて（欠損がはなはだしいものを除く）が無茎錐であり、基部にえぐりを入れてあるものが多い。

1類 （第26図1~12）

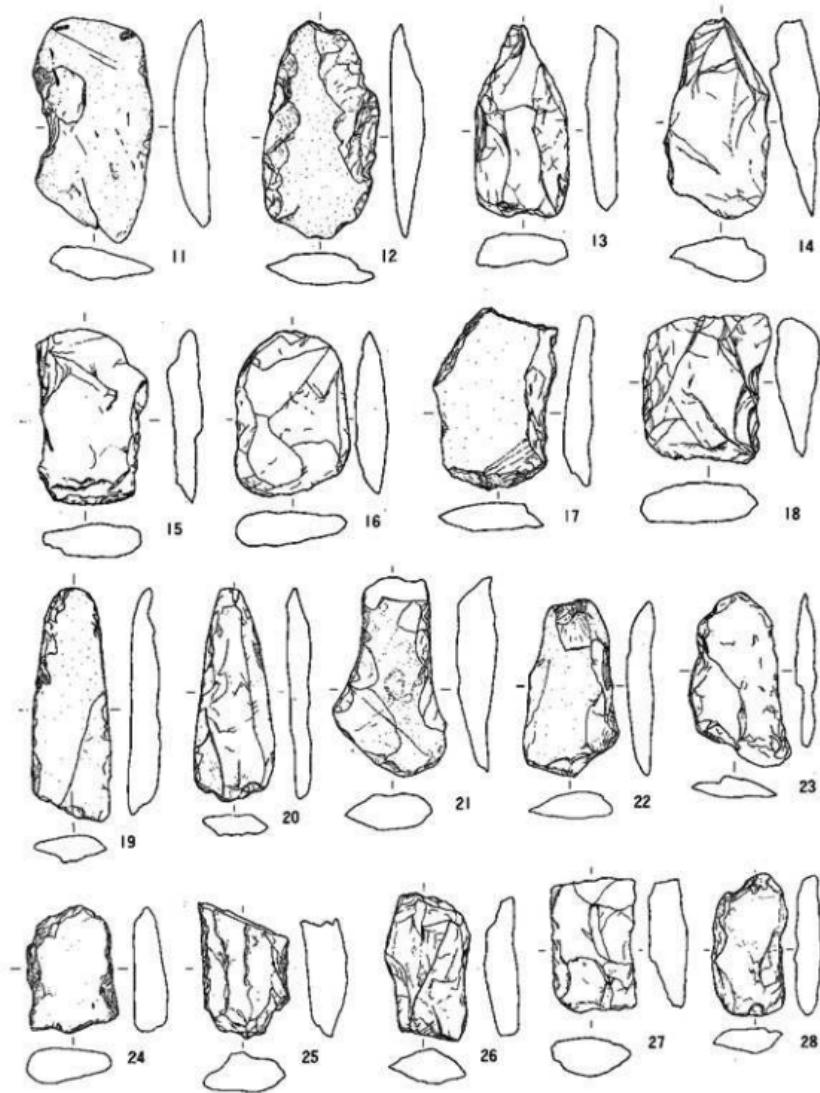
12点のうち8点がほぼ完形で、他はそれぞれ先端部、脚部を欠損している。形態的には全て基部にえぐりが入っている。えぐりは浅く、石錐の最大巾は1.4cm前後のものが多い。両側線はやや丸味がついているものと、直線に近いものとがある。剥離は丁寧に行なわれており、小形の割合には厚味がある。

2類 （第26図13~25）

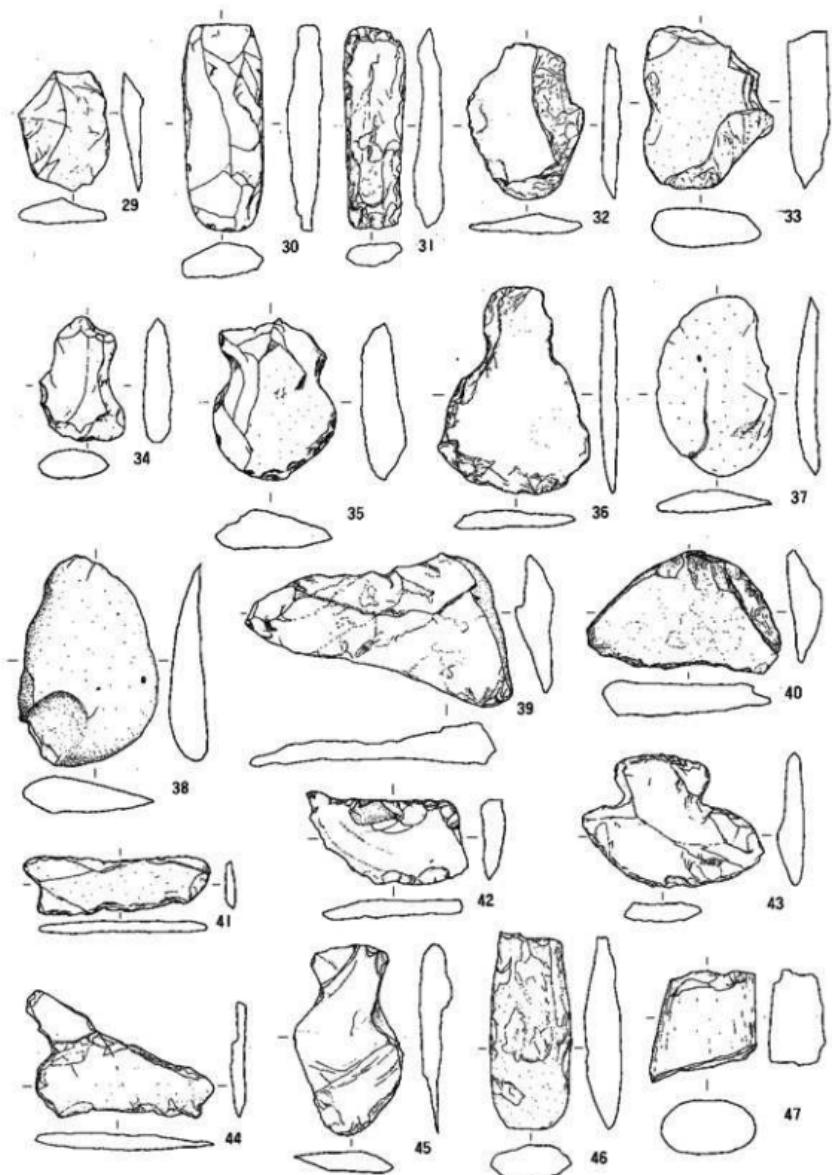
脚部が長くえぐりが深いのが特徴で、両側線は強く彎曲しており、形体的には丸味の強い錐で



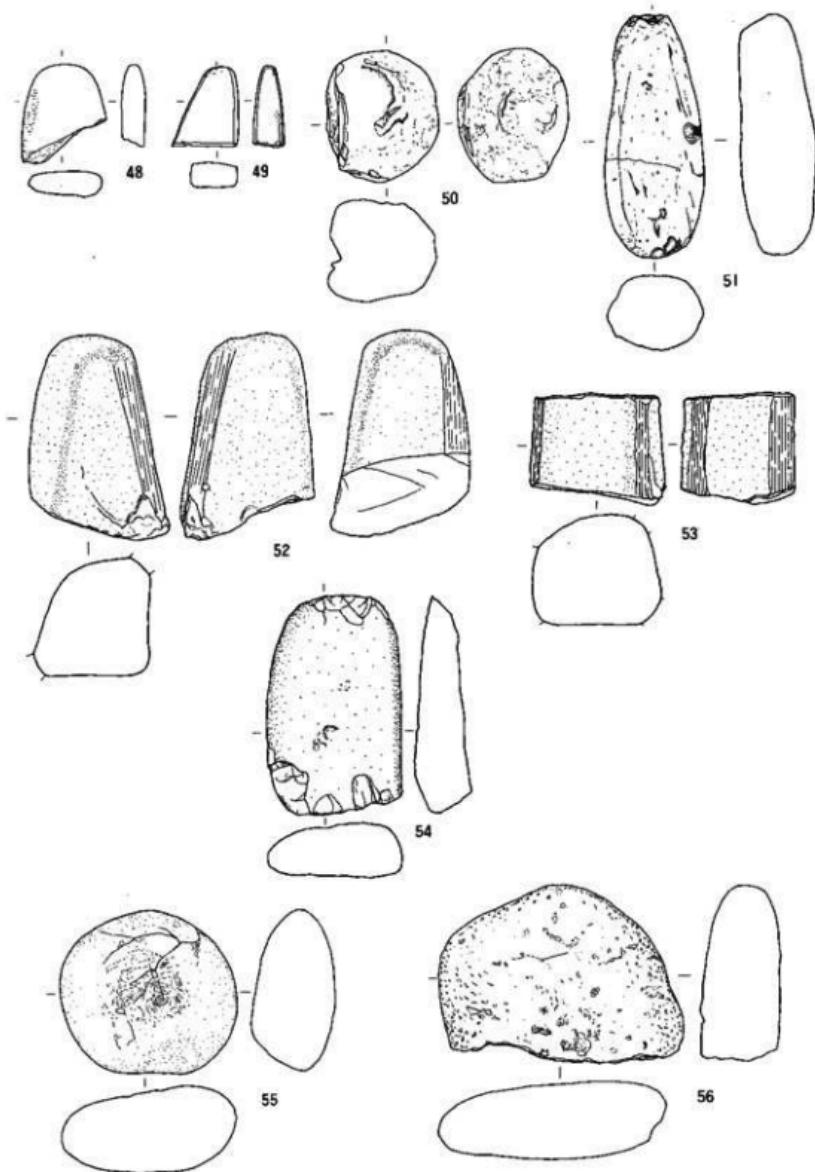
第30図 石器実測図(5)



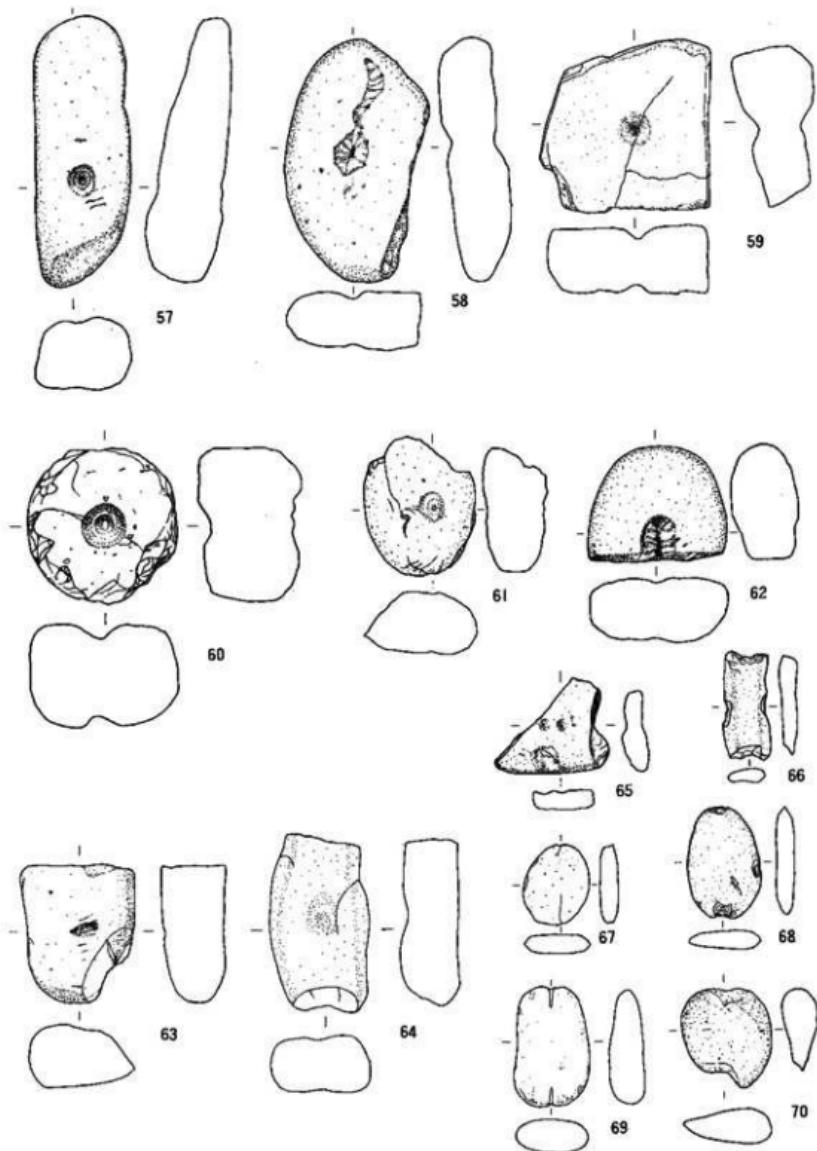
第31図 石器実測図(6)



第32図 石器実測図(?)



第33図 石器実測図(8)



第34図 石器実測図(3)

表-1 石器一覧表(1)

番号	種類番号	器種	法量			材質	現存状態 完形欠損	出土位區	備考
			最大長さ	最大巾	重量				
1		I	2.3	1.4	0.95g	ob	○	19A	
2		"	1.6	1.4	0.60g	ob	○	8J	
3		"	1.3	1.4	0.60g	ob	○	11K	
4		"	1.5	1.1	0.40g	ob	○	11I	
5		"	1.4	1.4	0.70g	ob	○	9.aE	
6		"	1.6	1.4	0.75g	ob	○	不明	
7		"	1.6	1.2	0.60g	ob	○	12G	
8		"	1.4	1.2	0.60g	ob	○	14J	
9		"	1.2	1.0	0.40g	ob	○	13L	
10		"	1.3	1.3	0.30g	ob	○	19F	
11		"	0.9	0.9	0.25g	ob	○	不明	
12		"	1.9	2.1	2.25g	ob		11J	
13		II	1.7	1.3	1.10g	ob	○	14G	
14		"	1.5	1.3	0.70g	ob	○	15M	
15		"	1.8	1.6	1.30g	ob	○	14L	
16		"	1.6	1.5	0.70g	ob	○	13L	
17		"	1.4	1.4	0.60g	ob	○	表	
18		"	1.0	1.3	0.70g	ob	○	11I	
19		"	1.3	1.2	0.50g	ob	○	14H	
20		"	1.3	1.4	1.55g	硬砂岩	○	13M	
21		"	2.1	0.9	0.50g	ob	○	10J	
22		"	1.3	1.1	0.60g	ob	○	13H	
23		"	0.9	1.7	0.60g	ob	○	11A	
24		"	1.0	1.1	0.30g	ob	○	2住	
25		"	1.0	0.7	0.40g	ob	○	14N	
26		III	1.9	1.5	0.80g	ob	○	11J	
27		"	2.2	1.5	1.10g	輝緑凝灰岩	○	14N	
28		"	1.6	1.5	0.70g	ob	○	11G	
29		"	1.5	1.4	0.55g	ob	○	14M	
30		"	1.7	1.3	0.60g	ob		不明	
31		"	1.5	1.4	0.50g	ob	○	13L	
32		"	1.4	1.5	0.60g	ob	○	12E	
33		"	1.6	1.1	0.60g	ob		18A	
34		"	1.6	1.0	0.50g	ob	○	13L	
35		"	1.6	1.0	0.30g	ob	○	12F	
36		"	1.1	1.2	0.30g	ob		7住	
37		"	1.1	1.1	0.35g	ob	○	12D	
38		"	1.5	1.2	0.50g	ob	○	12I	
39		"	1.2	1.4	0.70g	ob	○	2住	
40		"	1.2	1.3	0.70g	ob		15L	
41		"	1.2	1.1	0.30g	ob	○	18K	
42		"	1.4	1.1	0.40g	ob	○	10M	
43		"	1.5	0.9	0.60g	ob	○	8住	
44		"	1.2	0.9	0.30g	ob	○	16A	

表-2

石器一覧表(2)

番号	挿図 番号	器種	法量			材質	現存状態 完形欠損	出土位置	備考
			最大長さ	最大巾	重量				
45		III	1.0	1.5	0.40g	ob	○	18B	
46		"	1.0	0.9	0.40g	"	○	18E	
47		"	1.1	1.2	0.40g	"	○	12M	
48		IV	2.2	1.5	1.05g	"	○	不明	
49		"	1.9	1.2	0.75g	"	○	14L	
50		"	1.8	1.1	0.80g	"	○	12J	
51		V	2.6	2.1	4.80g	"		不明	
52		"	2.1	1.7	1.80g	粘板岩	○	10K	
53		"	1.9	1.5	1.70g	ob	○	13K	
54		"	2.2	1.8	1.60g	"		18B	
55		"	2.3	1.7	2.00g	硬砂岩		12K	
56		"	1.6	1.3	1.50g	ob	○	8住	
57		"	1.8	1.5	0.70g	"		11D	
58		"	1.6	1.3	1.30g	"		12L	
59		VI	2.0	1.3	0.80g	"	○	13D	
60		"	2.0	1.7	1.20g	"		10I	
61		"	1.8	1.5	1.20g	"	○	14L	
62		"	1.5	1.3	0.40g	"		16F	
63		"	1.4	1.2	0.55g	"	○	19F	
64		"	1.6	1.3	"	"		13O	
65		"	1.5	1.0	0.30g	"	○	14G	
66		"	1.3	1.3	0.20g	"	○	14L	
67		"	1.4	0.8	0.20g	チャート	○	13D	
68		"	1.4	0.5	0.20g	ob	○	不明	
69		"	1.2	1.6	0.80g	"		12J	
70		"	1.4	1.4	0.70g	"		12J	
71		VII	1.3	1.5	0.80g	"	○	表	
72		VIII	3.2	1.1	2.10g	"	○	5住	
73		"	3.2	1.5	2.30g	"	○	不明	
74		IX ドリル	3.8	2.1	3.60g	硬砂岩	○	13M	
75		"	2.2	0.7	0.80g	ob	○	11K	
76		"	2.4	0.7	0.80g	"		14N	
77		X	1.2	2.4	0.90g	"		6住7	
78		"	4.1	6.1	27.3g	輝緑凝灰岩	○	18E	
79		スクレーパー片サイド	4.7	2.0	10.4g	ob		12L	
80		"	2.9	3.3	6.50g	"		14L	
81		"	2.8	3.0	6.80g	"		14L	
82		"	3.6	2.2	6.20g	"		8住7	
83		"	3.7	1.5	4.75g	"		不明	
84		"	3.7	2.0	5.95g	"		10,0	
85		"	3.5	1.8	4.10g	"		13M	
86		"	2.5	2.4	3.45g	"		13H	
87		"	2.0	2.1	2.15g	"		10H	
88		"	2.6	1.6	2.90g	"		2住	

表-3 石器一覧表(3)

番号	插図 番号	器種	法量			材質	現存状態 光形欠損	出土位置	備考
			最大長さ	最大巾	重量				
89		スクレーパー片サイド	2.2	1.5	1.00g	ob		16F	
90		〃	2.4	1.5	1.30g	〃		8住	
91		〃	2.2	1.0	1.10g	〃		12M	
92		〃	2.7	1.3	5.00g	〃		18G	
93		〃	2.5	1.5	2.90g	〃		溝状	
94		〃	1.7	1.6	0.80g	〃		16K	
95		〃	2.2	1.1	1.00g	〃		12L	
96		〃	2.3	1.2	1.20g	〃		13L	
97		〃	2.0	1.1	0.60g	〃		10G	
98		両サイド	3.4	3.1	9.05g	〃		12D	
99		〃	4.6	2.3	8.60g	〃		10J	
100		〃	3.8	1.7	3.80g	〃		9J I?	
101		〃	3.0	1.2	2.15g	〃		2住	
102		〃	3.2	1.4	1.90g	〃		不明	
103		〃	2.9	2.3	2.60g	〃		12F	
104		〃	2.3	2.5	4.30g	〃		10E	
105		〃	2.5	2.1	1.95g	〃		12M	
106		〃	2.1	1.4	1.50g	〃		12M	
107		〃	2.8	1.3	2.10g	〃		不明	
108		〃	2.4	1.8	1.40g	〃		10J	
109		〃	1.9	1.7	2.00g	〃		13L	
110		〃	2.6	1.4	2.00g	〃		溝状	
111		〃	2.1	1.3	1.20g	〃		8住	
112		〃	1.8	1.7	1.80g	〃		13M	
113		〃	2.1	1.0	0.80g	〃		11L	
114		〃	1.8	1.7	1.60g	〃		13L	
115		〃	1.7	2.1	1.70g	〃		16F	
116		〃	1.9	1.5	0.75g	〃		12M	
117		〃	2.0	1.2	0.90g	〃		18A	
118		〃	1.5	1.1	0.40g	〃		18I	
119		〃	2.6	1.4	1.80g	〃		10J	
120		〃	1.7	3.4	1.80g	〃		8住7	
121		〃	3.4	2.2	4.80g	〃		a. 9ビ	
122		〃	3.3	2.2	4.00g	〃		13H	
123		〃	2.4	3.7	6.40g	〃		13H	
124		〃	2.6	1.9	3.00g	〃		13H	
125		〃	1.8	2.2	2.30g	〃		9K	
126		〃	3.1	2.0	4.40g	〃		14M	
127		〃	1.8	1.8	0.90g	〃		2住	
128									
129									
130									
131									
132									

表-4 石器一覧表(4)

番号	標図 番号	器種	法量			材質	現存状態 完形欠損	出土位置	備考
			最大長さ	最大巾	重量				
1	A	大型バチ型石斧	16.9	6.2	440g			8住	
2	A'	大型短鬚型石斧	12.6	6.5	200g	砂岩		12H	
3	A'	〃	9.7	6.4	225g			13L	
4	A'	〃	9.8	7.5	230g	砂岩		住居址内	
5	B	中型バチ型石斧	12.1	5.4	185g			12N	
6	B	〃	10.9	4.7	180g	砂岩		14M	
7	B	〃	9.4	4.7	90g	"		11H	
8	B	〃	8.6	7.2	90g	"		8住	
9	B	〃	7.7	6.7	185g	"		8住	
10	B	〃	5.4	6.8	105g	"		18P	
11	B'	中型環彎型石斧	10.8	5.4	140g	"		14M	
12	B'	〃	11.2	5.8	130g	"		13K	
13	B'	〃	9.8	4.8	120g	"		14A	
14	B'	〃	10.4	5.0	130g	"		18Z	
15	B'	〃	9.2	5.0	100g	"		13L	
16	B'	〃	8.5	5.8	120g	"		8住	
17	B'	〃	8.9	5.4	110g	"		10I	
18	B'	〃	7.4	6.0	150g	"		18F	
19	C	小型バチ型石斧	11.9	3.8	110g			13J	
20	C	〃	11.0	3.5	85g			12J	
21	C	〃	10.2	4.7	120g			14L	
22	C	〃	9.0	4.4	75g			15M	
23	C	〃	8.2	4.4	55g			8住	
24	C'	小型短鬚型石斧	6.6	4.4	80g	砂岩		13K	
25	C'	〃	6.1	4.3	80g	"		13B	
26	C'	〃	7.2	4.0	75g	"		13K	
27	C'	〃	6.7	4.1	90g	"		19B	
28	C'	〃	7.3	3.6	60g	"		不明	
29	C'	〃	6.1	4.5	40g	"		13M	
30	C'	〃	10.8	4.1	110g	"		12J	
31	C'	〃	10.4	2.9	75g	"		18R	
32	D	分胴型石斧	8.1	6.0	60g	"		13K	
33	D	〃	8.3	5.7	160g			8住	
34	D	〃	6.4	3.6	50g	砂岩		1住	
35	D	〃	8.2	6.2	140g	"		8住	
36	D	〃	10.8	6.4	80g	"		18N	
37	E		9.3	6.0	80g	"		2住	
38	E		10.4	6.7	150g	"		14M	
39	F	横刃型石斧	7.2	13.0	160g	"		8住	
40	"		6.0	8.9	130g	"		6住	
41	"		2.5	8.7	30g	"		1住	
42	"		4.2	7.3	50g	"		11M	
43	G	石匙	6.9	8.8	85g	"		8住	
44	"		3.7	9.3	50g	"		14M	

表-5 石器一覧表(5)

番号	挿図番号	器種	法量			材質	現存状態 完形欠損	出土位置	備考
			最大長さ	最大巾	重量				
45	H	タテ型石匙	9.9	5.3	80g	砂岩		14C	
46	I	局部磨製	10.0	4.2	120g			10K	
47	J	磨製	5.1	5.0	150g			表様	
48	"		4.4	4.0	40g			14I	
49	"		4.1	2.6	40g			16A	
50	K		6.9	5.9	400g			7住7	
51	"		12.7	5.0	390g			12M	
52	L	特殊磨石	10.3	6.2	625g	砂岩		9I	
53	"	"	5.2	6.8	430g	"		8住	
54	M		11.4	7.0	380g	"		8住	
55	"		8.5	9.2	470g	"		3住	
56	"		9.2	12.0	740g	安山岩		12I	
57	N	凹石	13.9	4.9	400g	砂岩		2住	
58	"		12.6	7.0	430g	"		26D	
59	"		8.4	8.5	500g	"		2住	
60	"		8.1	7.8	450g	"		不明	
61	"		6.5	5.7	160g	"		12J	
62	"		5.9	7.2	210g	"		18D	
63	"		7.2	5.5	220g	"		18A	
64	"		8.6	5.2	240g	"		表様	
65	"		4.2	3.4	50g	"		16F	
66	O	石錐	5.1	1.9	20g	粘板岩		14L	
67	"		4.1	3.5	25g	砂岩		溝状ベルト	
68	"		5.7	3.8	30g	砂岩		10H	
69	"		6.1	3.7	75g	砂岩		14D	
70	"		4.3	4.6	50g	砂岩		表様	

ある。13点のうち6点が完形であり、調整剝離は1類よりも丁寧で、形の整ったものが多い。20だけが砂岩であるが他はすべて黒曜石材である。

3類 (第26図26~47)

全体の3割がこの類で、巾の割に長さを有し、縦味である。えぐりの深さは1類と2類の中間で、先端部は尖鋸に作られている。両側縁は直線に近いものが多く、全体的に薄く作られている。

4類 (第26図48~50)

形態的には2類と3類の特徴をかねているものであり、左右対象のすっきりした形をしている。調整はきわめて丁寧で小さな剝離を連続させており、両側縁は大きく弯曲している。

5類 (第26図51~56、第27図57~58)

6点をこの部類とした。53、55はほぼ錐の形態を呈しているが、不整形のものが多く、錐の製作途中のような感じさえする。

6類 (第27図59~70)

はなはだしく欠損しており形態的分類の困難なものであるが、多くは1~3類中に含まれるものであろう。

7類 (第27図71)

えぐりが深くその部分が「U字形」を呈しているのが特徴で両側縁が外側にそっている。この形態を呈しているものは一般に「鉤形鎌」と呼ばれているもので、縄文時代早期の押型文土器と併出することが知られている。

8類 (第27図72~73)

石鎌の長さが共に3.2cmときわめて長く、えぐりも深く、脚部も長くなっている。両側縁はほぼ直線であり、剥離はきわめて丁寧である。側縁は細かなノコギリ歯状になっており、尖端は鋭く火形の優品である。

9類 (第27図74~76)

74は砂岩で残りは黒曜石である。いわゆる「ドリル」と呼ばれている石器である。74は先端が消耗し、繰返し使用したことを物語っている。

10類 (第27図77、78)

78は埠縁凝灰岩で、下部を調整し刃部を形成しているもので、主要作業部位が下部にある。石匙と呼ばれているものである。

搔 器

11類 (第27図79~91、28図92~97)

黒曜石の剥片に簡単な調整を施し、その調整が片側縁だけのものをこの類とした。ほとんどが幅長剥片の一側片を利用している。

12類 (第28図98~123、29図124~127)

剥片の2ヶ所に調整を施してあるものをこの類とした。両サイドを調整したものと、片側と下部を調整したものといろいろである。なかには全縁を調整し、作業部位が全周縁と思われるものもある。

打製石斧

42点の打製石斧を形状、使用目的等から9類に細分した。

A類 (第30図1)

大型バチ型石斧で、下部を調整して刃部を形成している。使用が繰返されたことを物語るように刃部に磨耗痕を見ることができる。

A'類 (第30図2~4)

中型短冊型石斧で、3点共に中間より上部が欠損している。2、4は石器の一面に自然面を残し石の側片を利用して作ったものである。他のものは母石の芯を使っている。「斧」というより、「鎌」という感じが強く、やはり打製石斧は土掘り具と見るのが妥当であろう。

B類 (第30図5~10)

中型バチ型石斧で5の他はみな欠損品で、ほとんどが母石の側片を利用し、下部の刃部は使用磨耗痕が見える。砂岩が多くこの大きさと形態の石斧が最も多い。

B'類（第31図11～18）

中型短握型石斧で8点のうち6点が完形品である。ほとんどが石の側片を利用して作られ、15は刃部を上下二ヶ所に付けている。すべて砂岩である。

C類（第31図19～23）

小型バチ型石斧をこの部類とした。すべて完形品であり、21は先端の刃部が著しく磨耗している。20は刃部が磨耗し、椎に使用痕の線が無数に入っている。

C'類（第31図24～28、第32図29～31）

小型短握型石斧で8点のうち5点は途中で折れ欠損している。巾が少くない割りには厚手の石器である。全部砂岩である。

D類（第32図32～36）

石器の中央の両サイドにえぐりを施してある石器5点をこの部類とした。両サイドのえぐりは石器を柄に着けるためのものであり、この種の石斧は「分調型石斧」と呼ばれている。

E類（第32図37～38）

母石の一面を打ち欠いてできたそのままを石器としたものである。刃部を側片に施しており、打製石包丁の機能をもつものと考えられる。

F類（第32図39～42）

砂岩の薄い材に下部に刃部を付けたもので、形態は一定していないが、刃部がほぼ平らで、薄くなっているのが共通点である。打製石包丁的な機能をもち、横刀型石斧と呼ばれる形をしている。

G類（第32図43～44）

砂岩製の横型石匙である。43は刃部を下部に施し、彎曲している。柄装着のためと考えられるえぐりは両側から深く施されている。44は少し変形の横刃型石斧である。

H類（第32図45）

いわゆる縦型といわれる石匙で、両側からのえぐりはなめらかになり刃部は両側片に付けられている。薄く調整された刃部は鋸くなっている。

I類（第32図46）

石器の刃部を両面から丁寧に磨き、蛤刃状になっている。上部が少し欠損しているが、調整痕がはっきりした石器で、局部磨製石斧と呼ばれている。

J類（第32図47、第33図48～49）

47は比較的大型な磨製石斧で、上部と下部が欠損しており、胴部がわずかに残ったものである。器面全体を磨いて調整している。48、49は定形石斧の一部である。

K類（第33図50～51）

55は球形をした石で大きさの割りに重量のある石で、全周縁に打撃痕を残し、使用目的は敲石と考える。56は自然石を利用したもので、一部分に打撃痕を残しこれも敲石である。

L類（第33図52、53）

表面はなめらかな自然石の一部に擦った痕や、わずかに敲いた痕を残すもので、「特殊磨石」と呼

ばれている。擦ってある部分は石器の角を利用している。角の磨り減り方を見ると、その使用が長い間繰り返されたことを特語っている。二点共に砂岩製である。

M類 (第33図54~56)

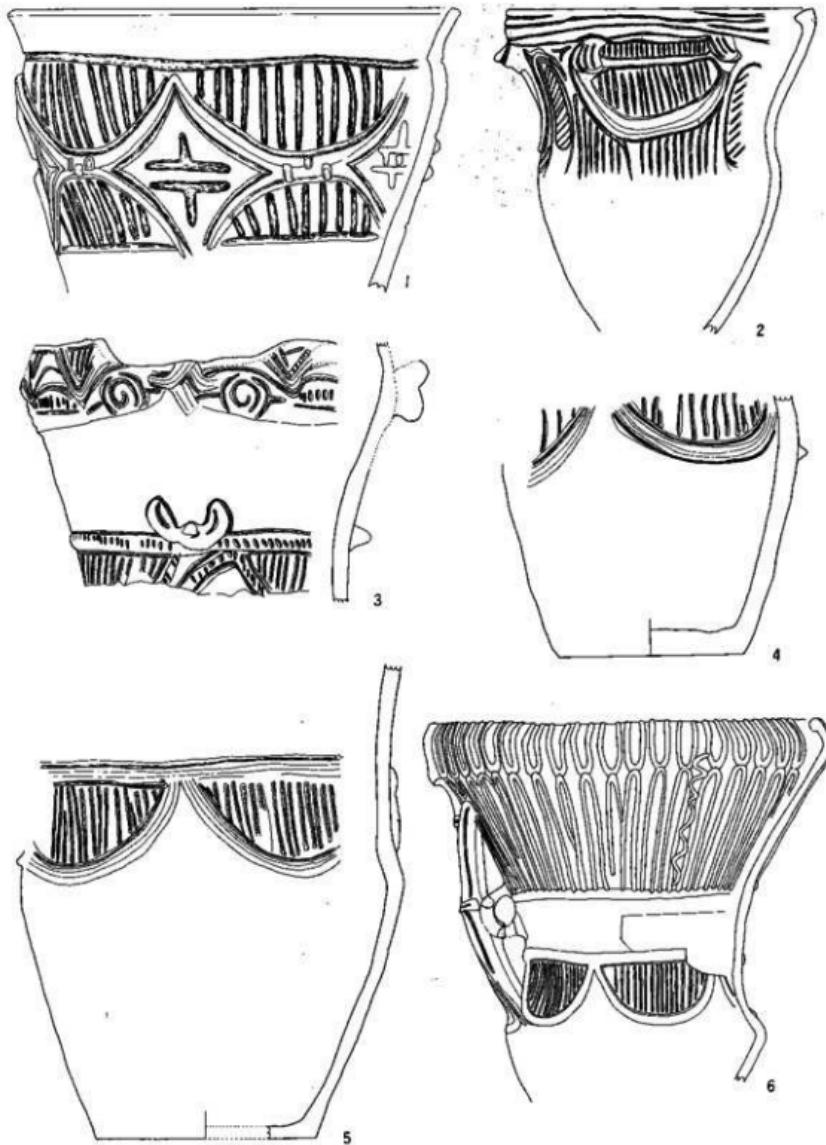
自然石を利用した石器で、石の表裏を磨っているもので一般に「磨石」といわれている。全面に使用された磨耗痕があり、石の面はなめらかである。

N類 (第34図57~65)

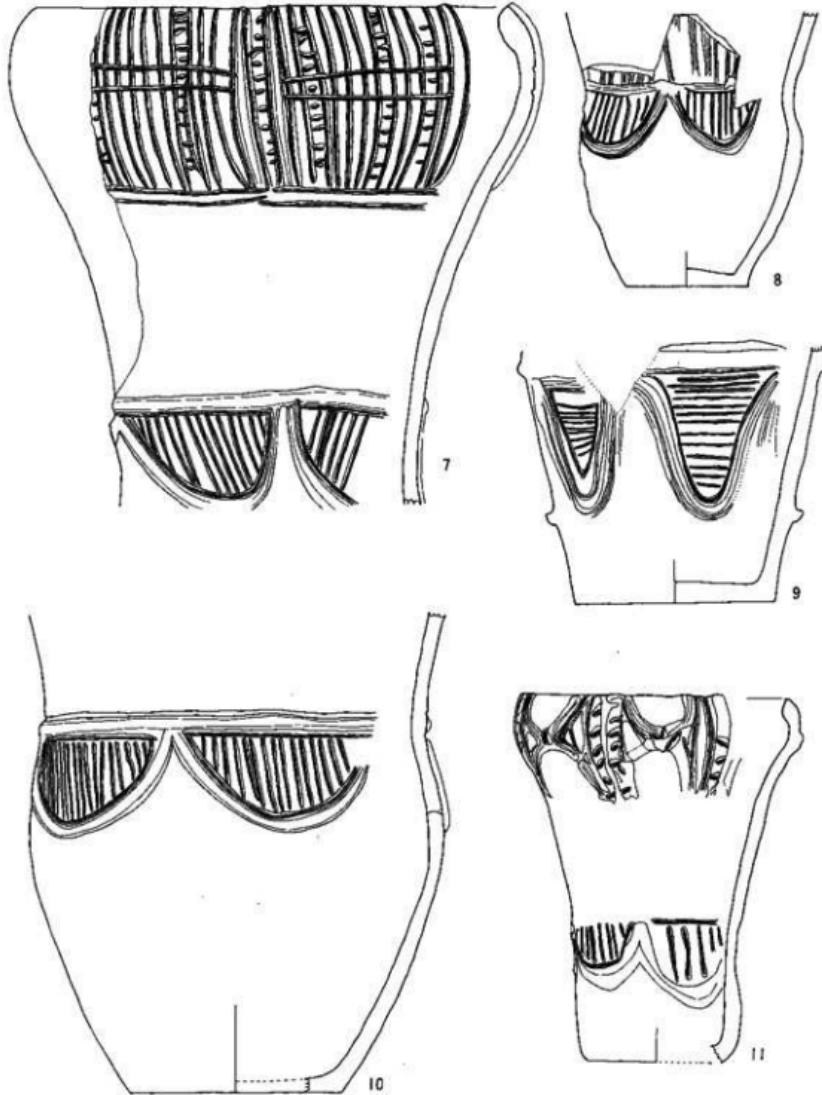
9点出土し一般に「凹石」といわれ、65、66は二つの凹があり、他は表裏に一つの凹が残っている。使用目的はいろいろ考えられるが、発火具としての石器であろうか。

O類 (第34図66~70)

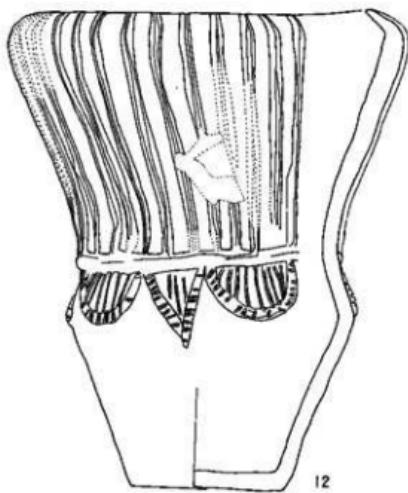
5点出土しているが、いずれも橢円形扁平な自然石を用い、上部と下部を打ち欠いたり擦ったりして製作している。重さはかなりバラツキがあり一定していない。



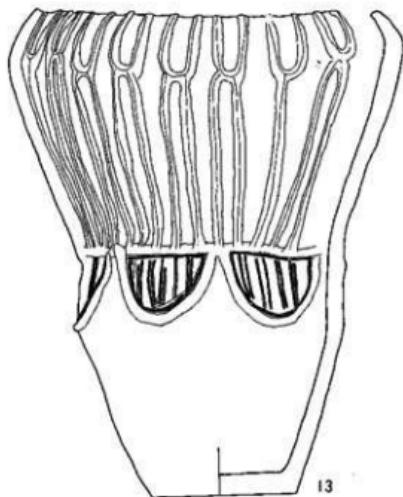
第35図 土器実測図(1)



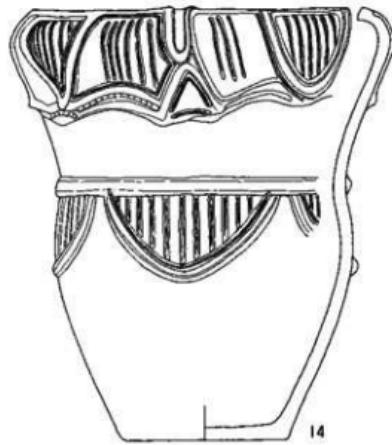
第36図 土器実測図(2)



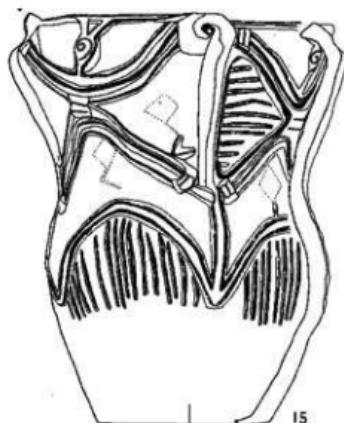
12



13

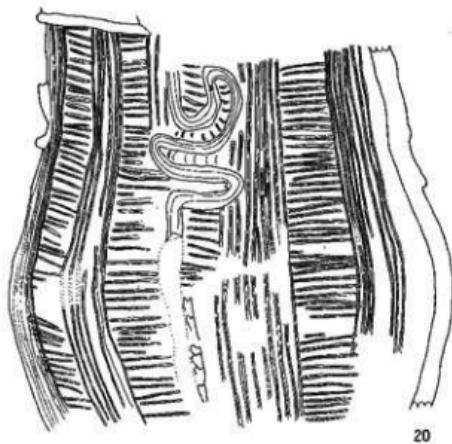
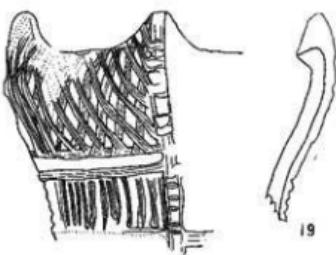
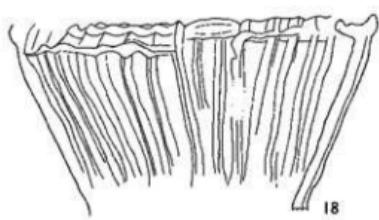
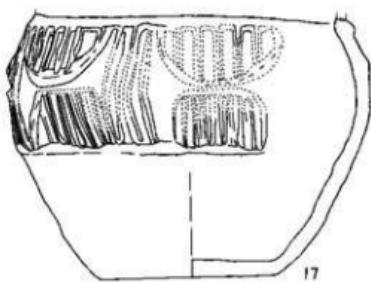
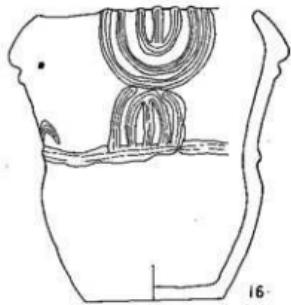


14

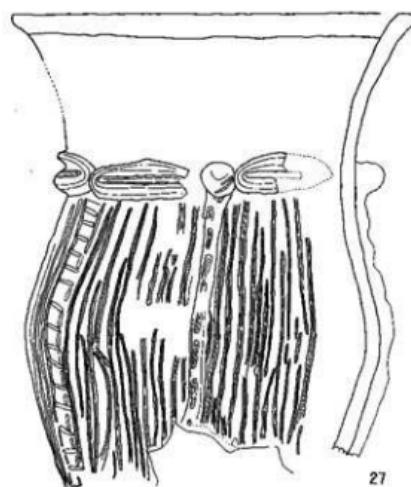
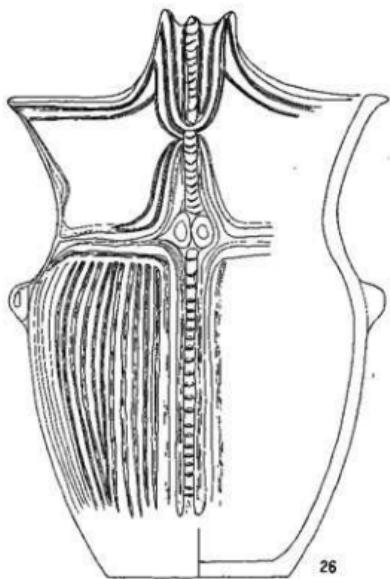
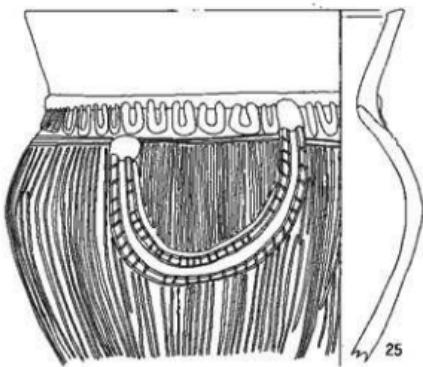
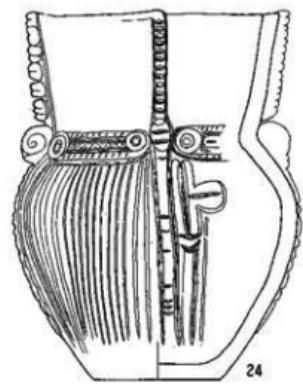
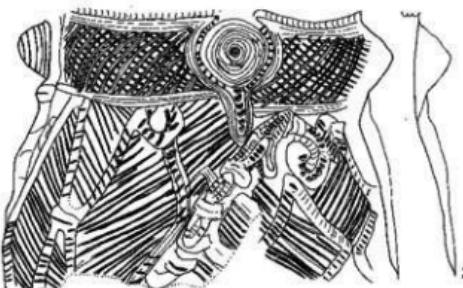
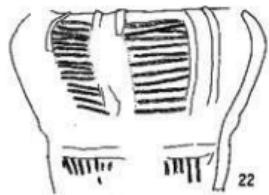


15

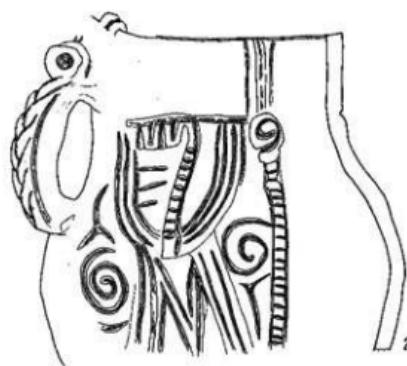
第37図...土器実測図(3)



第38図 土器実測図(4)



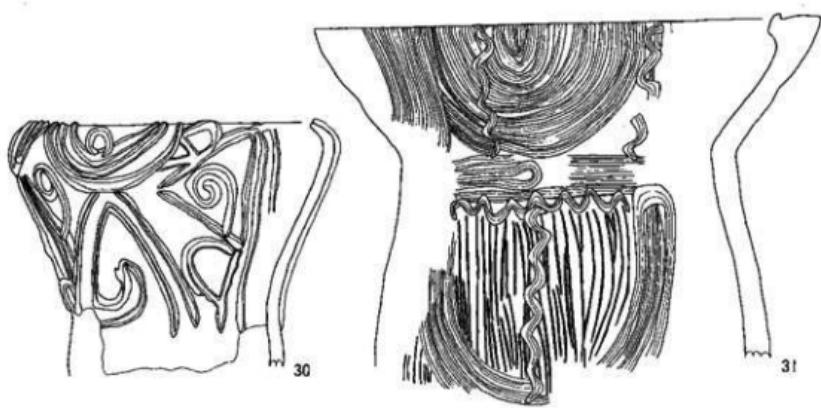
第39図 土器実測図(5)



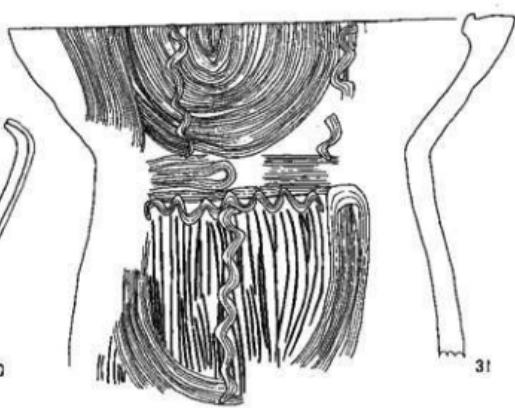
28



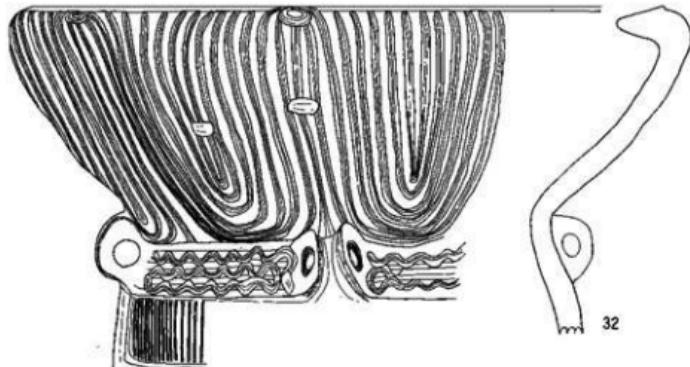
29



30

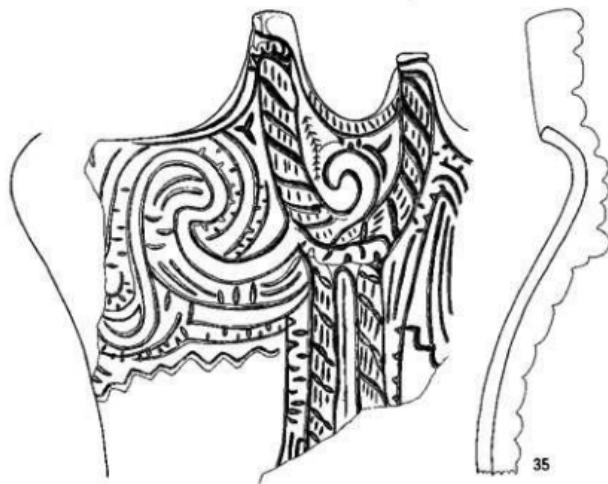
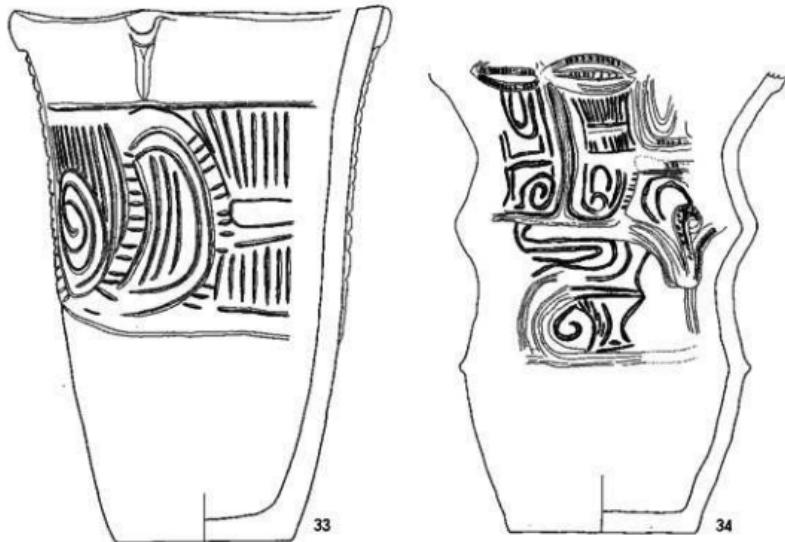


31

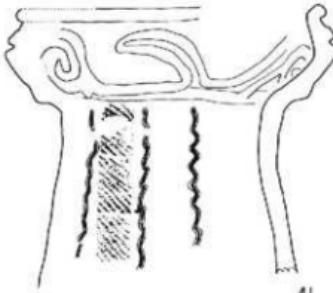
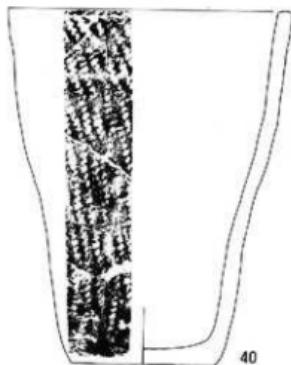
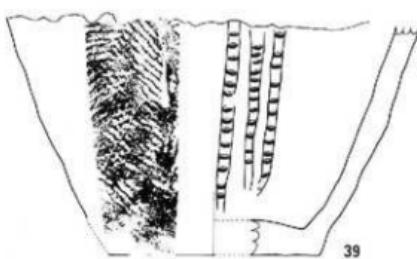
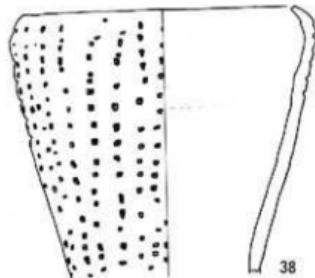
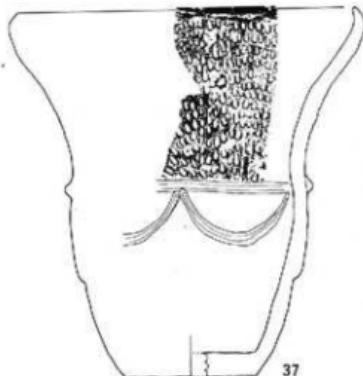
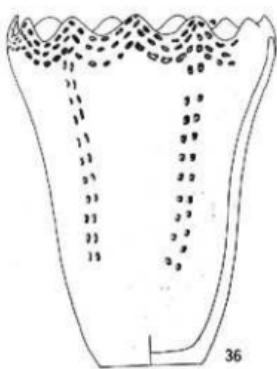


32

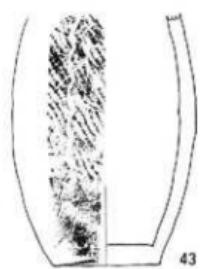
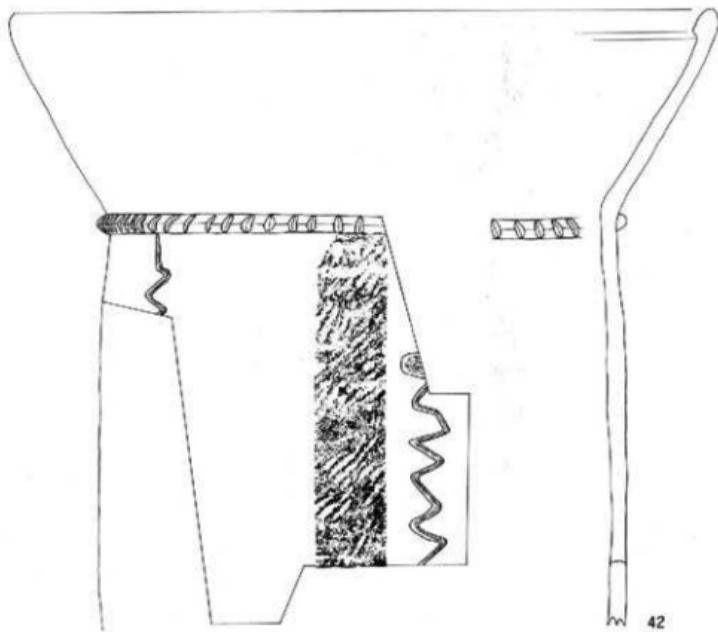
第40図 土器実測図(6)



第41図 土器実測図(7)



第42図 土器実測図(8)



43

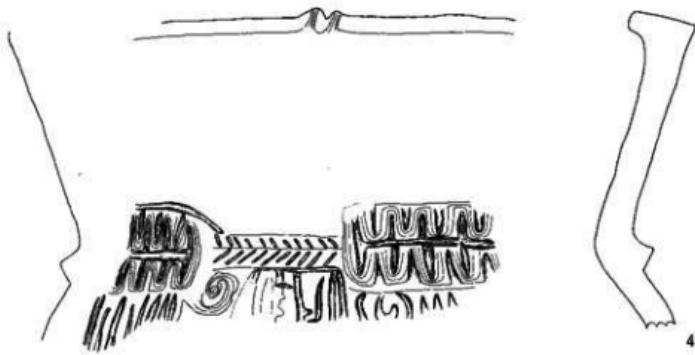


44

第43図 土器実測図(9)

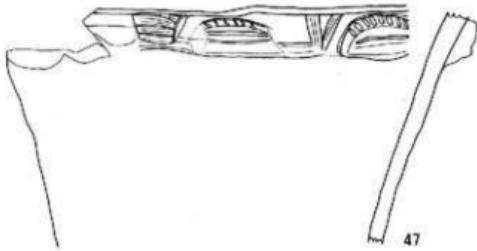


45

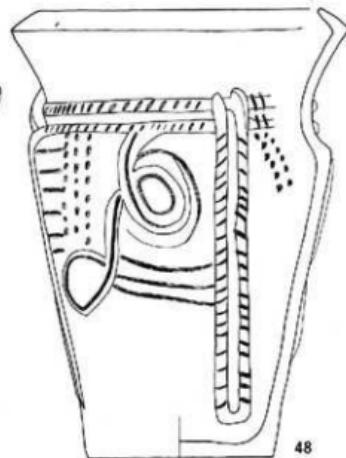


46

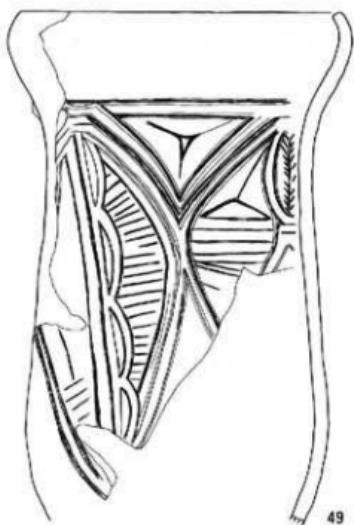
第44図 土器実測図(1)



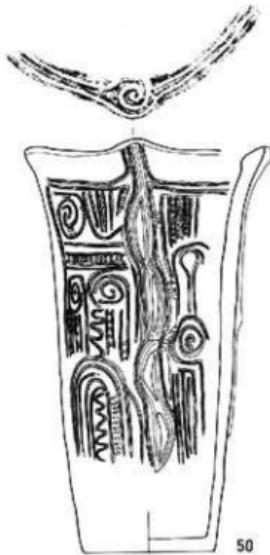
47



48

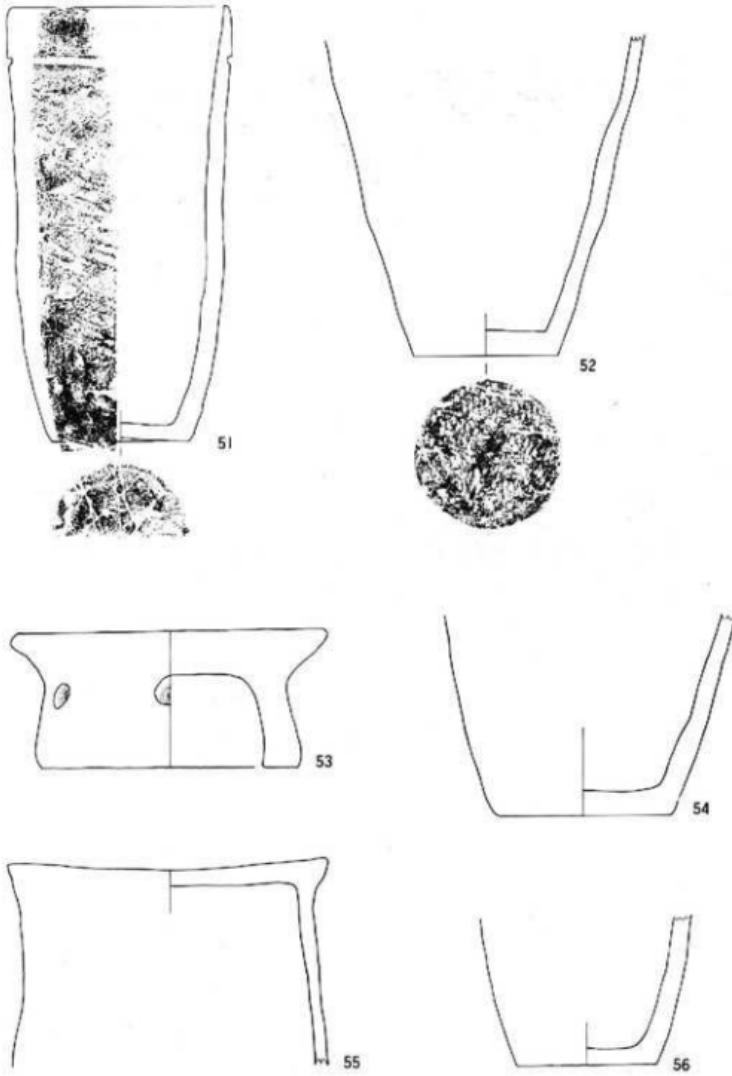


49

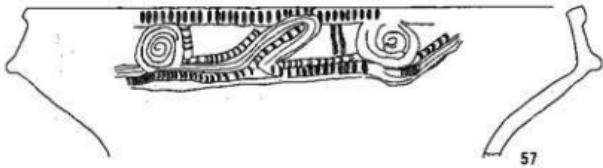


50

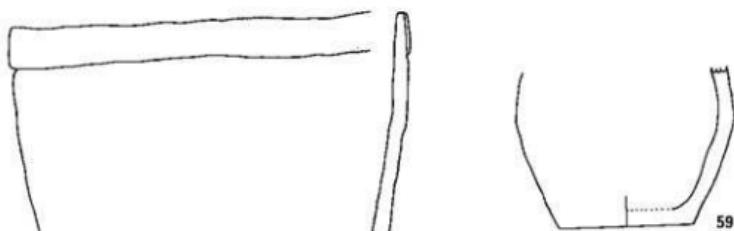
第45図 土器実測図(II)



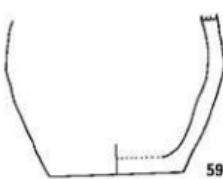
第46図 土器実測図(1)



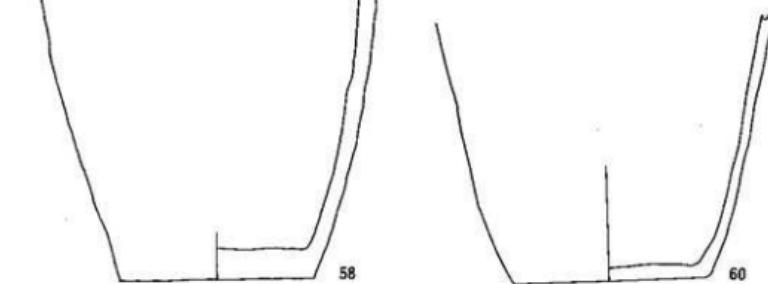
57



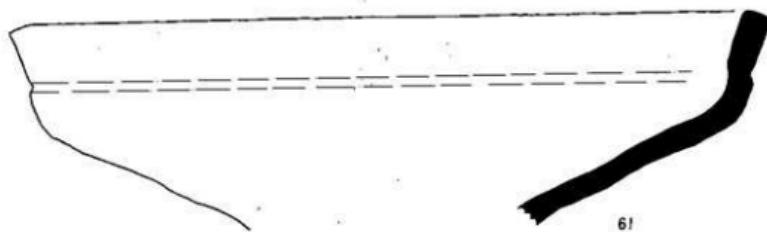
58



59

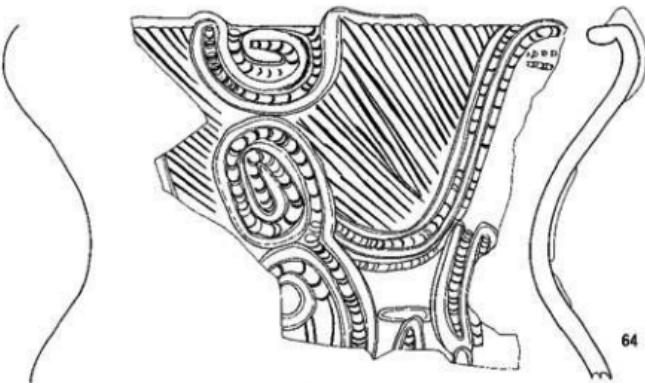
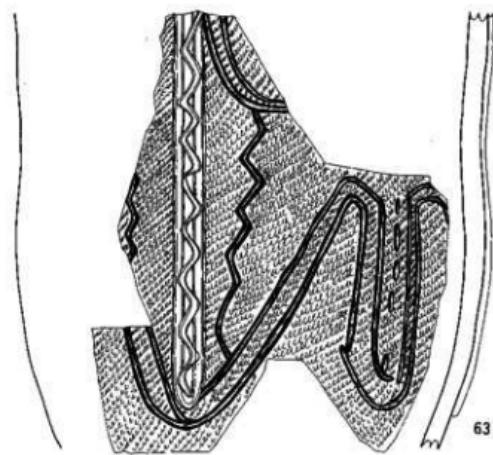
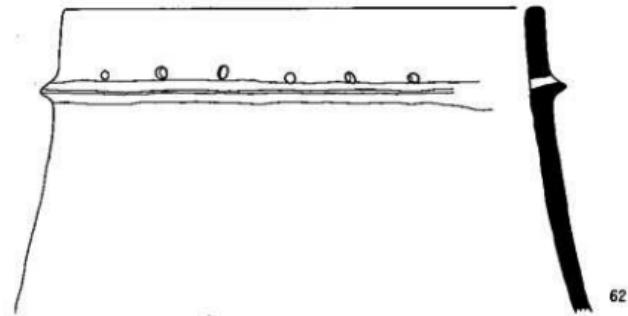


60

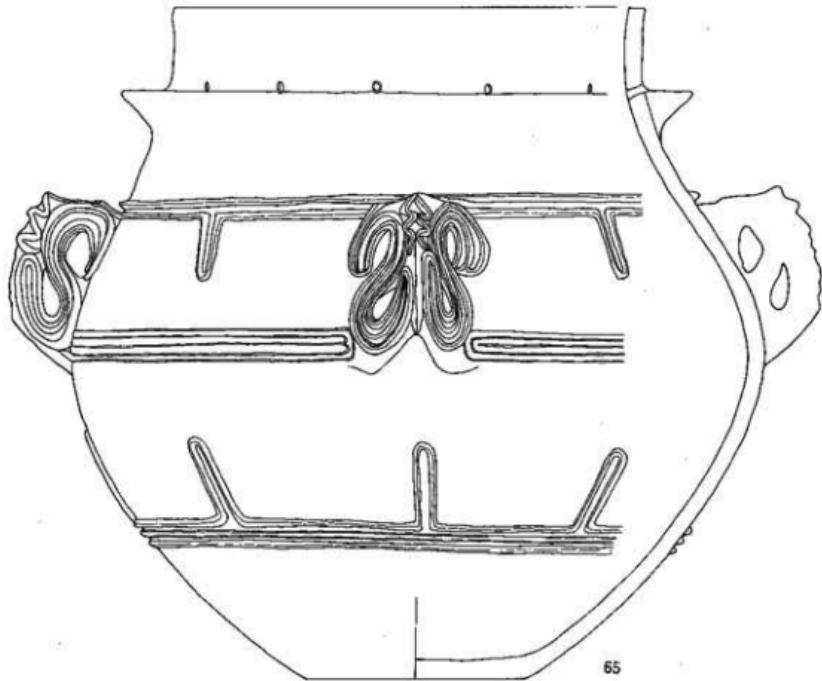


61

第47図 土器実測図(3)



第48図 土器実測図(14)



第49図 土器実測図(1)

3) 土 器

出土土器の概要

ここに分類した土器は図上で復原したものを含め65個体である。大まかな時期としては縄文中期中葉の井戸尻期から曾利期へと移行すると考える。出土した土器のほとんどが第2、8号住居址から出土した一括資料である。土器の形、文様、施文法、等から次のように分類した。

A類 この類の特徴は櫛形文が付けられていること、それにプラスして隆帯文が多いことである。器形としてはキャリバー形を呈した深鉢形土器である。

第35図-1は第8号住居址より出土した土器で、胴部上を残した深鉢形土器である。胎土に細かな雲母粒及び、やや大き目の石英、長石粒を含み焼成は良好である。口縁部に無文帶が平行し櫛形文が上下に組み合わさり、区画する隆帯が「X」字状にめぐらされている。櫛形の中には平行沈線が9~12本施されている。(土器番号1~19)

第35図-6も第8号住居址より出土した土器で、復原後の器高が48cm余の大型のものである。

胎土には細かな雲母や石英粒を含み、粘土粒は荒い。文様は大きく二帯に別れ、口縁から頸部にかけ細かい陰帶を縦位に付け口縁から5cmほど下で丸く曲げて接着している。胴部やや下に5つの横彫文が付けられ、太い隆帶で区画されている。区画された中には縦の沈線16本前後が付けられている。胴部のくびれ部及び底部に近い部分は無文帶である。頸部から胴部やや下の位置に付けられている把手はこの土器に大きな特徴を与える。把手はほぼ断面四角形を呈し把手中央部で丸い管状の輪によって胴部のくびれ部に付けられよりしっかりと取り付けられている。把手の背面は二条の沈線が縦に走っている。土器は胴部のくびれ部より口縁部にかけゆるやかに外反する曲線は非常に美しい。形の整った優品である。

第36図-7も第8号住居址出土の土器である。胎土に雲母を含み、焼成は良好で胴部より上は暗褐色、下は淡褐色を呈し、表面に炭化物が多く認められる。文様は大きく二帯に別れ、胴上部と胴下部に横彫文が施されている。上部の文様は口縁部から頸部にかけて下がる二本の陰帶で区画され、それと平行して沈線が施されている。垂下する沈線と直交するように二本の沈線が横に走っている。又、一区画中に三列の列点文が縦に垂下している。

B類（土器番号20~27）

乗飾文に平列沈線文をプラスした文様を主としている。

第39図-23は第2号住居址出土の土器である。頸部及び胴部が残ったが、口縁部及び底部は欠損している。器面全部に文様が付けられ、それも非常に入り組んだ文様である。胴部のくびれた部分と頸部に隆帶が一周し、その中は斜めの沈線とその上に細い粘土紺を張り付け、格子目状になっている。その中に四つの大きなボタン状突起が付けられている。このボタン状突起は粘土紺を渦巻状に巻き上げて形作っている。このうちの二つの突起の下に粘土紺を繩状に捻ってネクタイ状に付けられている。くびれ部より下は荒い網目状に陰帶をめぐらし、その隆帶の上を連続的に爪形が施されている。この隆帶によって区画された中は、斜目の沈線が付けられている。

第39図-24は第8号住居址より出土した土器で、胎土中に石英粒を多く含み、色調は赤褐色を呈しているほぼ完形の深鉢形土器である。口縁は平縁で、土器の外外面に炭化物が付着している。文様は胴くびれ部を一周する陰帶状文様と、縦に四等分する陰帶で器面を八区画に分けている。胴くびれ部の四区画は無文で、下部は半割竹管による平行条線文が底部近くまで垂下している。器高19cm余の小型の深鉢形土器であるが均齊のとれた土器である。

第39図-26は第2号住居址から出土した土器で、上部は暗褐色を下部は茶褐色を呈し、焼成の良い土器である。器形は胴部がくびれ、口縁に向てゆるやかな曲線で外反している。口縁部はわずかな波状になり、一部は把手状になっている。文様は胴部のくびれた部分下が「コ」の字状の隆帶で四区画され、その中は平行沈線文で埋めつくされている。胴上部は低い隆帶で区画されその脇を沈線文が平行して走っている。区画された中は無文であるがよく研磨され平らになっている。

C類（土器番号28~35、57、64）

この類は陰帶曲線文と沈線渦巻の文様が特徴となる。

第40図-29は第8号住居址出土の土器で、胎土中に少量の石英と雲母を含み焼成の良い土器で

ある。底部を欠損するが他はほとんど残っている。文様は全面に施され、口縁部から胴部にかけて二段に付けられた管状把手が特徴的である。器形は胴部が二段にわざかにくびれおり口縁部に近くなるにつれわずかに外反している。器面の文様は曲線隆帯で区画され、その中に沈線渦巻や平行沈線が各種の方向に走っている。又、隆帯の一部には連続キザミ目文が施されている。

第41図-33も第8号住居址から出土した土器で、胎土に長石、雲母を含み、赤褐色を呈した深鉢形土器である。焼成は良好で文様は胴部から頸部にかけて付けられている。やや巾の広い低目の隆帯が付けられ、隆帯と垂直するように大きなキザミ目が入っている。隆帯で区画された中には沈線渦巻文や平行沈線で埋られている。口縁部には四つの突起が付けられ、この部分は高くなつた波状口縁を呈している。胴下部から底部にかけては無文帶である。

D類 (土器番号36~38)

この類は刺突列点線文様が特徴的である。

第42図-36は第8号出土の土器であるが、胎土中に雲母を含み、暗褐色を呈した焼成良好な七器である。底部からわずかづつ外反し頸部が最も張り出している。口縁部には11個よりなる小さな波状口縁へと続いている。器形は均齊のとれた花瓶を思わせる。文様は波状口縁とほぼ平行して三列の刺突列点が施文されている。この三列の列点から底部に向って二列づつ6ヶ所から列点文が垂下している。

第42図-38は13-Lグリット出土の土器で、胎土・焼成とともに良好で暗褐色の色調を呈している。胴下部から底部にかけて欠損しており、器形は口縁にかけて直線的に外反し、口縁部に至つて内側に入っている。文様は口縁から胴部にかけば1cm間隔ではほぼ直線的な列点文が垂下している。刺突施文具は先の四角なもので、刺り箸の一方ぐらいの大きさである。

E類 (土器番号39~43, 51)

この類は回転繩文が主な文様である。

第42図-40は第8号住居址より出土した土器で、胎土中に雲母や長石を含み、焼成良好な土器である。色調は赤褐色を呈しているが、器の内面は炭化物が多く付着している。器形は底部から口縁にかけ、ほぼ直線に外反した円筒状の深鉢形土器である。口縁は平縁で、文様は器面全体に荒い繩文が施されている。繩文は口縁から頸部にかけて斜日に回転して施文しているが、胴部から底部にかけては繩文はほぼ垂直になっている。

第42図-41は第2号住居址出土の土器で、胎土中に雲母・長石の細かなものを含み、精選された良い土を用いている。焼成は良好で淡褐色を呈している。器形は胴部下が欠損しているため、全体は不明であるが、胴部が最も張り出し頸部に向って小さくなっていく。頸部に文様が集中し隆帯曲線が付けられている。頸部下は繩文が全面に付けられており、その中に結節繩文が垂下している。

第43図-42は第2号住居址出土の土器で、胎土中に多くの雲母・長石を含み、長石粒は大きい。色調は黄褐色で、器内面は赤褐色を呈し、焼成は良好である。頸部に太い隆帯が一本直線で一周し、その隆帯を約1cm間隔で大き目のキザミが付けられている。頸部より上は無文帶で、下は荒い繩文が全面に施されている。その隆帯から下にジグザグの曲線が沈線で垂下している。口縁36

cm余の大型の土器である。

F類（土器番号44、45）

この類は龍目文様の土器をまとめた。

第43図—44は第8号住居址出土のほぼ完形品の土器である。胎土中に細かな雲母を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は良い土器である。器内面にススが付着している。胴部が縮まりくびれでいるが、そこを境にして文様が大きく二つに分かれている。文様は口縁部から頸部にかけ「U」字状の隆帯を全面に付け、それと接するように胴部から逆「U」の字状に隆帯が付けられている。胴部下にも同じパターンで隆帯が付けられ、器全面を曲線の籠目で被ったような感じである。

第44図—45は第8号住居址出土の土器で、淡褐色を呈した焼成の良い土器である。文様は頸部から口縁にかけての一帯と、胴部からの二つに分けられている。上部文様は器が最も張り出した頸部に三本の隆帯を大きな波状に付けたもので、頸部を一周している。胴部下の文様は胴部を一周する隆帯から底部に向って直線で垂下する隆帯が数ミリごとに付けられている。その垂下する隆帯を束ねるように、胴部隆帯と平行して一本付けられている。器形はキャリバー形をした深鉢形土器で均齊のとれた良い形をしている。

G類（土器番号46、47）

「U」字形彫刻文を付けているものをこの類とした。

第44図—46は第8号住居址出土の大形土器口縁部破片である。胎土中に長石と雲母を含み、精選された胎土で焼成良好な土器である。色調は暗褐色を呈している。文様はくびれ部の胴部から頸部に集中している。一単位が 11×4 cmの長方形円形の小判型をした中に「U」字状の隆帯を連続させた彫刻文が施されている。その文様を結び付けるように三角隆帯が付けられ、その隆帯には細かな連続キザミ目が付けられている。頸部から口縁部にかけては無文帶でよく研磨されている。器厚が1.7 cmもあり完形ならば、大型で重量感あふれるすばらしい土器であったと予想される。

H類（土器番号48~50、63）

縦帶区画文が主な文様構成をしている。

第45図—48は第8号住居址出土の土器で、深鉢形を呈し胎土に長石を含み、上部は暗褐色、下部は淡褐色の色調である。器形は頸部でくびれ二本の隆帯が横に走っている。口縁部付近は無文帶が続いている。そこより二本一組の隆帯が三ヶ所から垂下している。この隆帯により頸部より下が三区画に分かれ、その三区画の中はそれぞれ違った文様が施されている。文様は追っているが構成要素は、曲線隆帯、連続刺突、直線沈線によって成立している。器形はほぼ直線的に立ち上がる円筒形であり、頸部から口縁にかけゆるやかに外反している。口縁は二つの突起が出て波状となしている。文様は口縁から下がる隆帯により四区画されており、区画された中は、直線及び、曲線の沈線ですっかり文様化されている。主として沈線渦巻きと「S」字状の連続沈線が多く施されている。口唇部にも沈線渦巻文及び沈線が施されている。

I類（土器番号52、54、56、58~61）

無文の土器をこの類とした。

第47図—58は第8号住居址よりの出土土器である。胎土に長石、雲母を多く含み焼成は良好で、

淡褐色を呈した円筒状深鉢形土器である。口縁は平縁で2cm巾の折り返しを付けている。土器の底部に近い内側には炭化物が多く付着している。この時代の土器としてはめずらしく、全く文様を付けず、底部から直線でゆるやかに外反する円筒状の器形である。平縁の深鉢形土器である。

第47図-61は第2号住居址より出土した土器で、胎土中に長石・雲母を含み焼成はあまりよくなくもろい土器である。外側は淡褐色を呈し、内側に朱が施してある。外面に比べ丁寧な仕上げをしている。平縁の口縁と平行して頸部に一本沈線を付けている。洗面器状を呈した浅鉢形土器である。

J類 (土器番号53、55)

器台と呼ばれている器種をこの類とした。

第46図-53は第4号住居址出土の土器で、胎土中に長石を多く含み、赤褐色を呈しているが、土器は繰返えし火を受けた感じがし、器面は黒く変色し、胎土もろくがさがさしている。胴部に径1cmほどの穴が二個づつ二ヶ所、計四個あいている。この種の土器がどのような使われ方をしてきたのか考えさせられるところであるが、この台の上に煮焚用の器をのせ、繰返し火を受けたような感じがしてならない。

K類 いわゆる有孔鉢付土器と呼ばれているもの二つをこの類とした。

第48図-62は第8号住居址より出土したもので、口縁部を含む一部分の出土であった。図上復原により図のようになつたが、頸部下は不明である。頸部から口縁に向って直線的につばむ形で鉢状突帯は高さ6mmほどで、ほんのわずかに付いている感じである。鉢状突帯の一部を貫いて内側にやや下がる感じで4mmほどの穴が一周している。

第49図-65は第2号住居址から出土した大型有孔鉢付土器である。胴部が最も張り出し頸部から口縁にかけてほぼ直線的に立ち上がる。文様は胴部より下に、荒い縞文を地文とし、横に三段の隆帯を付けている。胴やや上部に対応するように付けられている四つの「S」字状大型把手は豪壮なこの土器を一段と大きく見せている。把手より上は無文で、朱が施されたことを何うようく残ったものを観察することができる。頸部に付けられている大きな鉢状突帯は上面がほぼ平らで、器面から3cm余も張り出している。この鉢のすぐ上にやや下向きに13個の孔が等間隔にあけられている。有孔鉢付土器もかなりの数が出土しそれぞれに観察されているが、本例のような器形と大きさはめずらしいのではないかと思う。又、使用目的も諸説あり今後共論議の続きそうな土器である。

表-6 猿射山遺跡出土土器一覧表 (1)

図版番号	分類	出土地	器種	器形	法	量cm	色	調成	胎	土	備考
35図1	A	8住	深鉢形土器	口徑	高さ	22.9 (14.7) 0.7	灰褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 2	A	8住	"	"	"	9.5 (17.0) 0.5	淡褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 3	A	8住	"	"	"	17.9 (13.5) 0.9	褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 4	A	8住	"	"	"	(13.5) 0.9	赤褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 5	A	8住	"	"	"	(24.8) 0.8	淡褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 6	A	8住	"	"	"	40.4 (39.6) 1.0	灰褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
36図7	A	8住	"	"	"	24.5 (26.5) 0.8	灰褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 8	A	8住13L	"	"	"	(14.2) 0.7	赤褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 9	A	8住	"	"	"	(13.5) 0.9	赤褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 10	A	8住	"	"	"	(25.1) 0.8	赤褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 11	A	8住	"	"	"	13.7 (19.1) 0.6	淡褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
37図12	A	8住14L	"	"	"	17.4 (24.9) 0.8	赤褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 13	A	8住	"	"	"	17.7 (25.0) 0.9	赤褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 14	A	8住	"	"	"	17.2 (22.7) 0.7	暗褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 15	A	8住	"	"	"	14.8 (21.5) 0.8	褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
38図16	A	9住覆土	"	"	"	11.5 (15.3) 0.7	暗褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 17	A	9住	"	"	"	(13.7) 0.7	茶褐色	やや良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 18	A	8住	"	"	"	18.8 (10.0) 0.8	淡褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 19	A	3住03	"	"	"	15.3 (12.8) 0.8	暗褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 20	B	2住No.8	"	"	"	(19.5) 0.9	淡褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 21	B	11J No.3	"	"	"	(0.8) 0.9	赤褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
39図22	B	8住10	"	"	"	11.2 (9.5) 0.6	灰褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 23	B	2住	"	"	"	(15.0) 0.9	黑褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 24	B	8住覆土	"	"	"	12.6 (19.3) 0.8	赤褐色	やや良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 25	B	10I	"	"	"	19.6 (18.0) 0.8	暗褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 26	B	2号住	"	"	"	19.6 (25.1) 0.7	茶褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 27	B	2号住	"	"	"	20.8 (22.0) 0.7	赤褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
40図28	C	8住	1	"	"	13.5 (16.7) 0.8	赤褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 29	C	8住	"	"	"	(15.4) 0.7	黄褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 30	C	8住	"	"	"	14.6 (12.8) 0.6	赤褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 31	C	2住	"	"	"	26.4 (20.3) 1.1	暗褐色	良	細かな柱状の浮きを有するアラヤ人型の 猿山の洗浄刷毛に炭化物の付着が認められる箇所がある。		
n 32	C	12-J	"	"	"	(18.0) 1.2	やや良	長石小粒			

()現向

表一七 御村山遺跡出土土器一覽表 (2)

器種	分類	出土地	器種	法 量cm	口徑 深溝	高 溝	厚 さ	色	胎	土	備	考
41回33	C	8住	深鉢形土器	19.2	27.7	1.1	淡褐色	良	微砂混り、長石末			
n 34	C	8住	"	—	(25.1)	0.9	赤褐色	良	鐵石・雲母	頭部より上に炭化物付着		
n 35	C	8住	"	21.0	(18.0)	0.7	淡褐色	良	長石末			
42回36	D	8住	"	12.8	18.4	0.6	暗褐色	良	雲母・小砂混り			
n 37	D	8住	"	(17.6)	19.2	0.8						
n 38	D	8住	"	14.0	(14.0)	0.7	暗褐色	良	精選・長石末			
n 39	E	8住2	"	—	(12.2)	1.2	淡褐色	良	長石粒・雲母微細	外側に炭化物付着		
n 40	E	8住	"	14.8	18.5	0.8	赤褐色	良	雲母を含む、長石末			
n 41	E	2住	"	15.2	(14.5)	1.0	淡褐色	良	雲母を含む			
43回42	E	2住	"	—	36.4	(32.2)	0.9	黃褐色	良	長石粒を含む2mm程度のやや大き目るものも含む。	長石粒は径2mm程度のやや大き目るものも含む。	
n 43	E	2住	"	—	(13.0)	0.8						
n 44	F	8住	"	12.6	14.7	0.6	赤褐色	良	細かい雲母を含む			
44回45	F	8住	"	22.6	30.0	0.9	淡褐色	良	微砂混り			
n 45	G	8住	"	32.6	(16.5)	1.7	暗褐色	良	長石末・雲母を含む	始じが解説されている		
45回47	G	8住	"	—	(12.5)	0.8	淡褐色	良	精選	始じが解説されている		
n 48	H	8住	"	14.8	23.4	0.6	淡褐色	良				
n 49	H	8住	"	16.7	(26.9)	0.8	淡褐色	良	雲母微細・長石末			
n 50	H	8住	"	12.5	21.6	0.7	赤褐色	良	長石・小砂混り			
46回51	E	6住	"	11.1	22.7	0.9	暗褐色	良	雲母混り	木の裏底、粘土のキメは荒い		
n 52	I	8住	器台	—	(17.0)	0.9				器面を磨いてある		
n 53	I	4住	深鉢形土器	—	7.5	1.7	赤褐色	良	長石多く含む、雲母少ない	焼成が悪くボロボロしている。		
n 54	I	8住	深鉢形土器	—	(10.5)	0.9	赤褐色					
n 55	J	11M-N	器台	—	(10.7)	0.6	淡褐色					
n 56	I	深鉢形土器	"	(8.0)	1.0							
47回57	C	2住	"	29.0	(7.8)	0.8	褐色	良	雲母・小石混り			
n 58	I	8住	"	20.5	28.6	0.8	淡褐色	良	長石・雲母微	口縁部折り返し、内曲に炭化物が付着している		
n 59	I	8住ベルト	"	—	(8.2)	0.8	赤褐色					
n 60	I	"	"	—	(14.0)	0.5						
n 61	I	2住	浅鉢	39.8	(11.0)	1.1	淡褐色	もういい	長石・雲母を含む	内側に水垢の塊じであります。表面にぐらぐらした感じな感じがします。		
48回62	K	8住	有孔つぼ付土器	24.8	(15.9)	1.0	暗褐色	良		外曲をよくナデている		
n 63	H	2住	深鉢形土器	—	(23.0)	1.0						
n 64	C	2住	"	29.8	(19.4)	0.8						
49回65	K	2住	有孔つぼ付土器	34.0	(48.4)	1.2	黒褐色	良	雲母を含む	上部黒褐色、下部淡褐色	()欄	

ま　と　め

御射山遺跡は、冥輪町農業基盤整備事業施工対象区域内に入ったため、昭和54年7月31日から9月14日まで、緊急発掘調査を実施したが、その結果を要約すれば、次の通りである。

1. 本遺跡は、天竜川左岸に形成された比高約100mの河岸段丘上に在り、東側の不動峯山塊より流出する2つの小支流によって開析された東西2500m、南北1500mの段丘面の山麓に近く住居し、遺跡の範囲は東西200m、南北200mを占め、主として縄文時代中期の集落址が展開している。
2. 発掘調査は、その極く1部約700m²の全面発掘調査を実施したところ全面に亘って竪穴住居址が複合し集中した状態で発見された。
3. 発見された遺構は、次の通りである。

縄文時代中期竪穴式住居址	12軒
" " 土壙墓	1口
" " 溝状遺構	1条

4. 検出された遺物は、次の通りである。

縄文式中期土器	完型及半完型	65箇
"	破片	多数
縄文時代中期土製品	土偶他	10箇
縄文時代中期石器	石斧他	197箇

発掘の詳細については、前述の通りであるが、調査の経過及び整理を通じて得られた問題点について概述したい。

まず第1は、住居址内に一括された土器集積遺構が2つの住居址に存在したことである。第2号住居址においては、直径6mの楕円状竪穴プランのはば東西中軸線に沿って10数箇の完型土器を平面紡錘形（東西3.5m、南北2m）に配列してあった。但しこの中心部は、後世に径1mの円孔を床面下内に至るまで掘りこんだため、その部分だけ土器が抜きとられた形跡が認められた。この中心部に置かれた土器は不明であるが、大部分は深鉢と甌であるが、配列部の東縁部に土偶が1箇体置かれ、中心部近くに大形有孔鉄付土器が置かれていることや北縁の配石炉石の上に大形浅鉢が伏せられた状態で出土したことなど意識的な配置状態が認められた。この土器配列のパターンは、まだ他の類例を知らないが恐らく竪穴式住居址廃絶に伴う祭祀的儀礼と思われる。

また第8号竪穴住居址においては、斜面に構築された半地下式竪穴住居址の中心部北寄りに置かれた配石炉址を覆う堆土の（覆土第II層）の中に長径4mの長椭円状に完型土器30数箇体が集積された状態で発見された。覆土第III層は、第19図に見る如く竪穴址廃絶後、北東部の高地の上部土層が流入したものでありこの上面に土器群が存在したことは、竪穴廃絶後の凹地に一括遺棄されたものと観ることができる。これらの土器群のパターンは、いわゆる吹上パターンとし

て把えられている。なお、覆土土層内からも1箇の土器が（土器24）横転した状態で出土したが土器形式から見て第II群の土器よりやや後出的なものである。

第2の問題として前記の2つの土器群は、同じ繩文中期後葉の1群と見られがちであるが、土器形態や施文様式に差異を見出すことができ、時期的な位置づけが可能になろう。

まず第8号住居址出土の1群は、屈曲の少ないキャリバー形の土器（以下甕と称す）を主体として、深鉢、浅鉢、有孔鉢付土器がセットとなっている。施文は口縁帯は、細い粘土紐による平行隆線で埋め、中には頸部が無文帯になるものがあり、胴部はいずれも隆線による櫛形文をめぐらせている。（第35図～43図No.5, 6, 7, 10, 12, 13, 14）

また別に、櫛形文が変形した文様を口縁帯から胴部にかけて全面に施し器面全面を飾るものがあり（同図1, 15, 49），櫛形文の盛行ぶりを物語ると共に、櫛形文の終末期の様相を示している。

また縦形区画文をなす1群、即ち太い隆線によって全面を三角形、長方形に区画し内部を沈線により並列直線文、渦巻文で埋めるものが（同図28, 29, 34, 35, 50）などがある。

いずれも、井戸尻式的要素の強いものであるが、これに新しい施文要素をもつものがある。これは、隆帶による蛇行文を複雑に組み合せて器面全面または上半部を飾るもの（同図30, 44, 45）でNo.45は口縁帯部施文となって、曾利式の要素の先駆をなすものであろう。その他に刺突列点文で全面を簡素に飾るもの（同図36, 38）、回転縄文帯を全面に施すもの、全く無文のものなどがある。

以上述べたように井戸尻式的要素を強くもちながら、次の曾利または加曾利E式的要素の先駆をなす施文を若干出現させていることから見て、伊那谷地域の井戸尻期最終末の様相を示す土器の1群を見てよいであろう。

次に第2号住居址出土の1群の土器についてであるが、復元された土器は半数に近いので、土器組み合せの状態は一応表現していると見てよい。

まず器形は、甕においてキャリバー形の屈曲が深くなり、土器全般が、8号址出土のものより大型化してきている。

施文は、深鉢においては口頸部にかけては無文帯となるものが多く器体の上位になる頸部に隆帶を回して区画し、それ以下の膨む胴部に隆線による垂飾を施して胴部全面を縱に数区画しその間を並列した沈線で埋めるもの（同図20, 26, 27）が盛行してくる。また口頸部に細い粘土紐を貼り合せて格子目文を構成するもの（同図23）や口縁から胴部にかけて唐草文的な隆帶による垂飾文で飾り、内部地文を並列沈線で充填するもの（同図23, 64）や太い半截竹管で半満巻文を口縁帯全面に覆い、隆帶によるU字形垂飾文を胴部に施し蛇行沈線を口縁から胴部にかけて垂飾させるもの（31）がある。また胴部全面に回転縄文（LR, RL）を施し、沈線による蛇行文を懸垂するもの（同図41, 42, 43）などがある。また、大形有孔鉢付土器の隆帶によるS字状複合文の把手は、明らかに曾利I式の系統を示している。

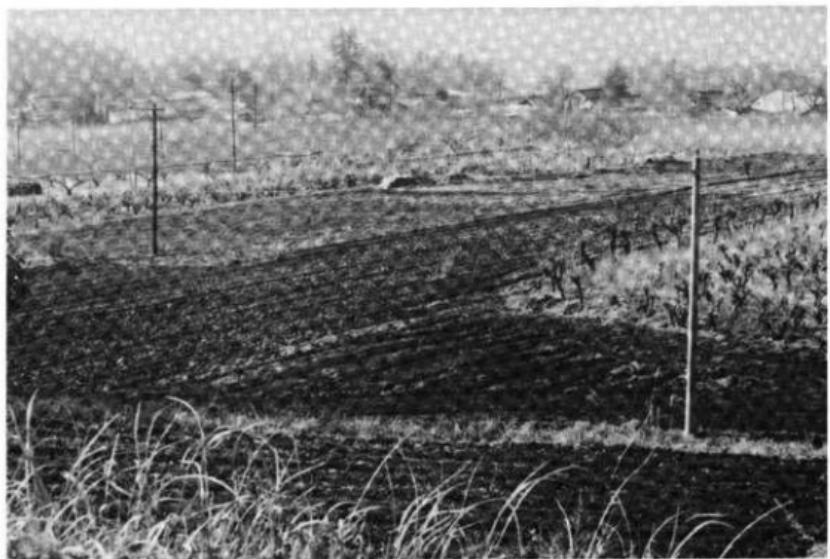
以上、第2号住居址床面に特殊な形狀に配列された土器の1群は、いわゆる唐草文様はまだ出現せず曾利式土器の極めて古い時期の様相を示しているものと認められるのである。

出土土器整理の段階において以上2つの住居址から出土した2つの土器群の様相は、縄文中期中葉最終末とこれに引き続く中期末葉最初頭のそれぞれの特徴を示している。その意味で伊那谷のこの時点における様式的な土器群と見て差し支えないであろう。伊那谷における縄文中期中葉から末葉にかけての細分された編年はまだ確立固定されていない。この2つの土器群について、他の遺跡出土の土器との比較、関連を行ないその住居を明らかに実証するべきであるが、今回は別の機会に譲り所見のみに止めたいと思う。

終りにのぞみ、この報告書の作成に力を尽された発掘調査主任柴登巳夫氏、箕輪町郷土博物館学芸員竹入洋子氏はじめ調査員の方々に謝意を表する次第である。

(調査団長 林 茂樹)

図 版



▲遺跡地近景



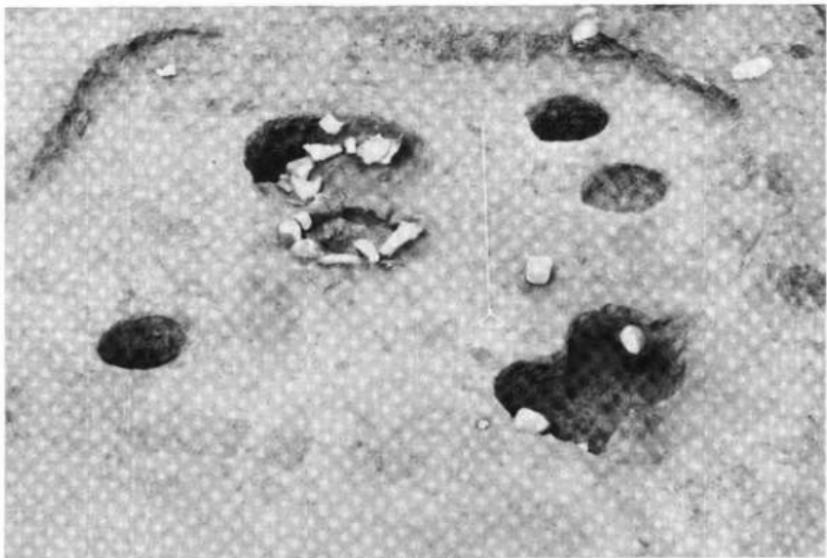
▲第1回版 遺構全景



▲第1図版 第1号住居址



▲第2図版 第2号住居址



▲第3号住居址



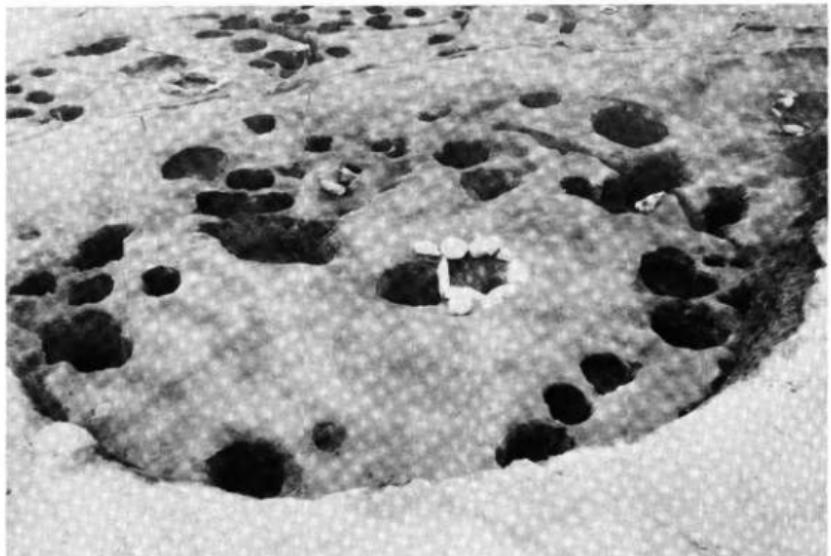
▲第3図版・住居址第1集中区



▲溝状造構



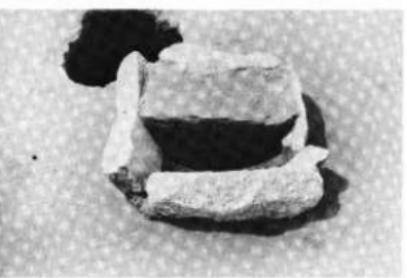
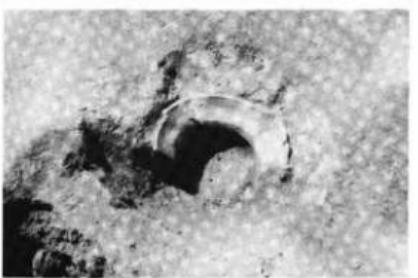
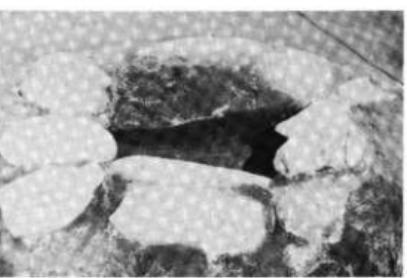
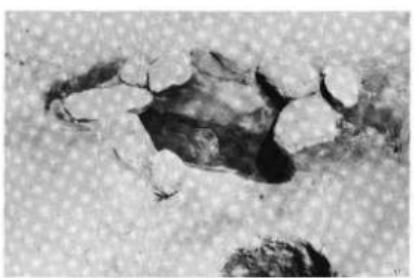
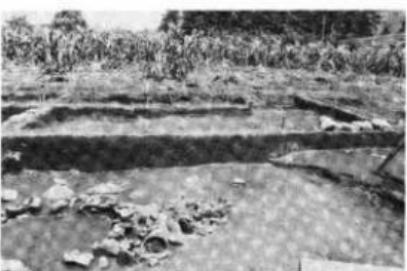
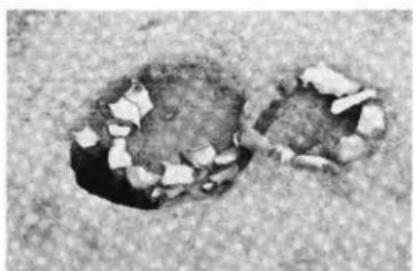
▲第4図版 石組



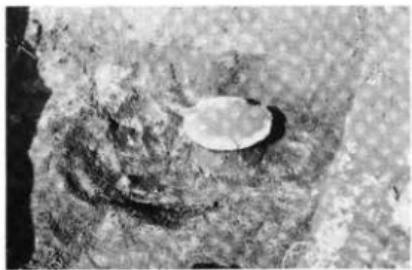
▲住居址第2集中区



▲第5図版 土 塚 墓



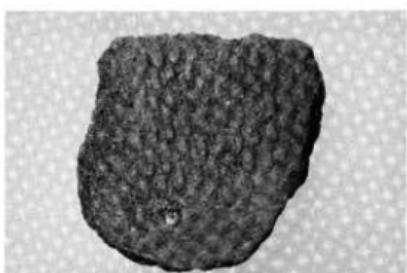
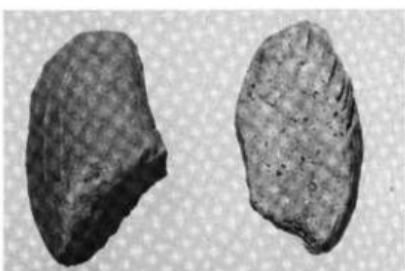
▲第6図版 造構状況



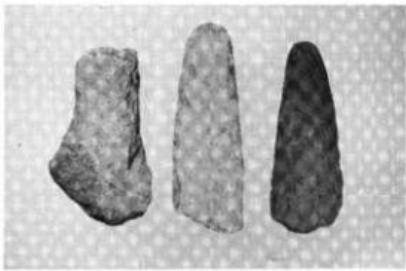
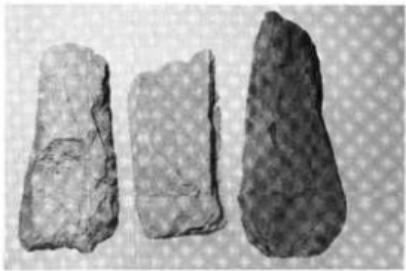
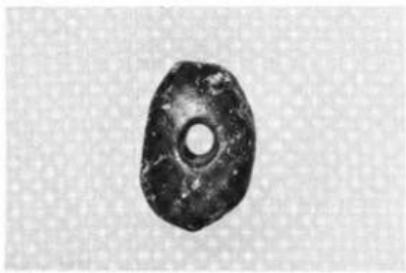
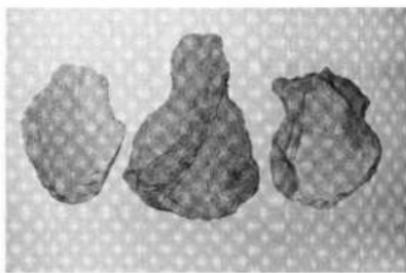
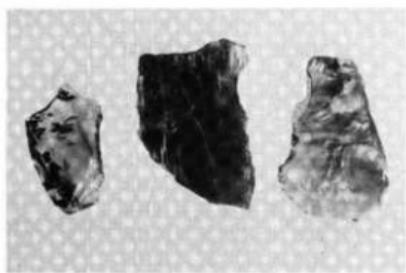
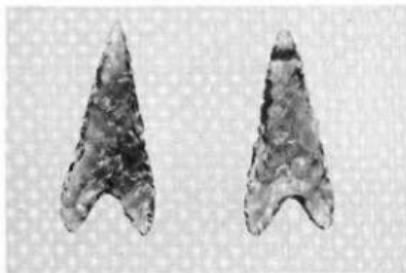
▲第7回版 遺物出土状況



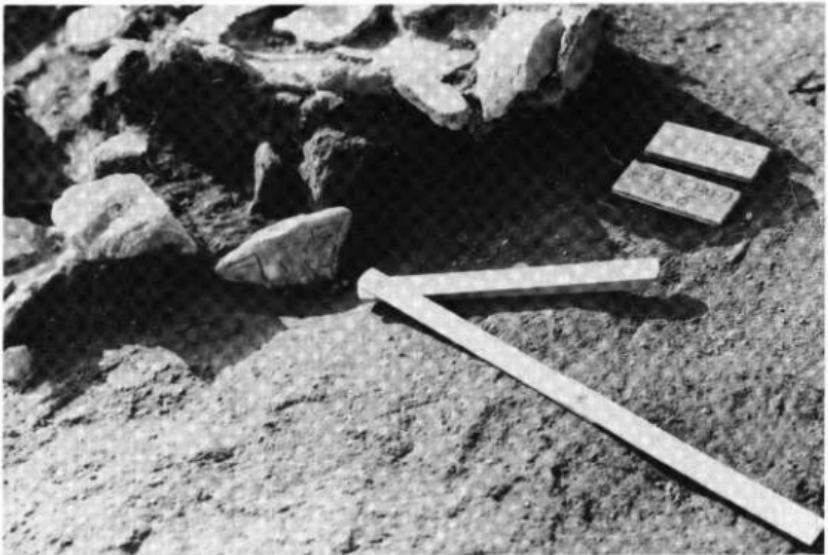
▲第8回版 調査状況



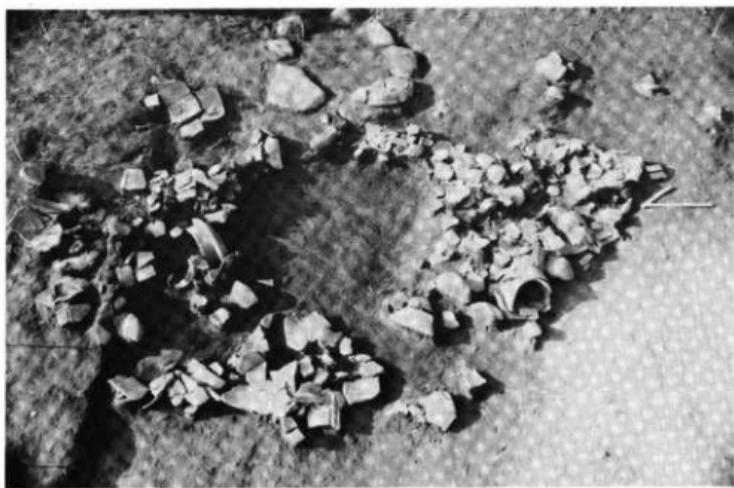
▲第9図版 出土土器(土偶土笛等)



▲第10図版 出土石器



▲第11図版



▲第12回版



1. 8号住



2. 8号住



3. 9号住



4. 8号住



5. 8号住



6. 8号住



7. 8号住



8. 8号住



9. 8号住



10. 2号住



11. 2号住



12. 8号住



13. 8号住



14. 8号住



15. 2号住



16. 8号住



17. 10Jグリット



18. 8号住



19. 8号住



20. I3L グリット



21. 8号住



22. 8号住



23. 8号住



24. 8号住



25. I2M グリット



26. 8号住



27. 8号住



28. 2号住



30.

御射山遺跡

～緊急発掘調査報告書～

昭和55年3月31日 印刷

昭和55年3月31日 発行

発行所 長野県策輪町教育委員会

印刷所 伊那市 小松総合印刷機